

## アンティベラム期フィラデルフィアにおける 反黒人暴動と黒人コミュニティ

鶴 月 裕 典

### 一、本稿の視角

アンティベラム期フィラデルフィアの黒人コミュニティは、北部諸都市中でも最大の自由黒人人口を擁するとともに、J・フォートン (James Forten) や R・パーヴィス (Robert Purvis) とした北部黒人の指導的人物を数多く輩出し、全国黒人集会をはじめとする黒人運動の拠点として、ニューヨークとともに北部黒人社会に重要な地歩を占めていた。同時に同コミュニティは、富裕な黒人たちの洗練された暮しぶりや黒人教会を中心に整備された種々のコミュニティ組織によっても知られていた。しかし、そうした繁栄の一方で、フィラデルフィアの黒人コミュニティは苛烈な人種差別に晒されてもいた。就中、黒人人種差別の

最も暴力的な発現形態の一つである反黒人暴動をみると、同コミュニティは一八三四年から四九年にかけて、大規模なものだけでも五度にわたる白人民衆の攻撃によって、多大の被害を受けている。

これまでこの反黒人暴動については、アンティベラム期合衆国における白人民衆の集団的暴力行使の一環として、或は白人による露骨な差別感情の爆発の証左として、同時代人からも後世の研究者たちからも少なからぬ関心を集めてきた。特に一九六〇年代以降の合衆国においては、現実社会での人種暴動のエスカレーションやヨーロッパ前産業社会の群衆行動をめぐる研究からの刺激を受けつつ、反黒人暴動研究は単なる暴動の経過説明や人種差別への道義的憤りといった観点を超えて、白人暴動参加者の分析、とりわけその動機の解明にふみ込むことで大きく前進した。<sup>(1)</sup>

黒人・白人間の顕然たる接点の一つである反黒人暴動をめぐる研究が、人種関係を考察する上で不可欠のものであることに異論はなからう。しかし、原因論に比重をおいた従来の研究には、一つの大きな問題が存在しているように思われる。それは、暴動の一方の主役である黒人コミュニティ自体が必ずしも綿密な検討対象とされてこなかったこと、換言するなら黒人コミュニティが一貫して白人から脅威を抱かれ、暴力を行使される一方的犠牲者、受動的存在としてのみ捉えられてきたことである。しかし、様々な差別に晒されつつも黒人コミュニティは白人社会と社会空間を共有し、その中で願望や目的達成の手段を模索した。だとすれば、黒人コミュニティを客視する従来の視角は、同コミュニティの持つ主体的な歴史構成者としての側面を無視し、延いては人種関係にも一面的にしか光をあててこなかったのではなからうか<sup>(2)</sup>。

そこで本稿では、反黒人暴動の分析とりわけ攻撃対象の検討を手懸りに、黒人コミュニティ内のダイナミクスに注目することで、同コミュニティを能動的存在として把握したいと考える。さらには、この内在的ダイナミクスと反黒人暴動を含む白人社会による人種差別⇨外在的ダイナミクスの相互作用に注目することにより、人種関係の複雑さを多少なりとも明らかにしたい。具体的には、黒人教会や黒

人有産層の家屋・家財といった攻撃対象が、黒人コミュニティ内ではいかなる位置や意味を持ち、都市空間においていかなるありようを示したのか、それらは黒人コミュニティ指導層の追求する抵抗姿勢とどのような関係にあったのか、その抵抗姿勢に反黒人暴動はいかなる影響を及ぼしたのか、こうした問題を中心に考察をすすめることとしたい。

以上示した本稿の視角について、今少し立ち入って説明するために、従来の都市黒人史研究全般のあり方についても一言しておきたい。管見を恐れずにいえば、永きにわたって都市黒人史研究は人種の敵意や居住隔離といった、黒人コミュニティにとっての外在的ダイナミクスへの関心に支配されてきた。確かにその中で、F・フレイジアらの社会学的現状分析の限界を超えるべく、長期にわたる歴史的变化や地域的多様性を意識した研究の必要性が認められたことは評価すべきだが、検討対象が外在的ダイナミクスに留ったため、黒人が自らのおかれた環境に対応していく過程は総じて等閑に付されてきたといえる<sup>(3)</sup>。これに対し、近年ではJ・ボーチャートの研究に代表されるように、従来の偏りを修正すべく、黒人コミュニティの内在的ダイナミクスに着目する研究が現われている<sup>(4)</sup>。ただし、ボーチャートが便宜的にはいえ人種関係を分析から除外したことが暗示するように、内的価値観のみの追求は従来とは逆方向の歪

みをもたらす危険を孕んでいる訳で、新旧二つの研究潮流をいかに有機的に結合していくかが、今後の課題といえよう。本稿が反黒人暴動を軸に、黒人コミュニティをめぐる内在的・外在的ダイナミクスの相互作用を問う、分析視角上の意味もここにあると考える<sup>(5)</sup>。

同時に、従来の研究においては都市社会全体に働く構造的ダイナミクス⇨都市の産業構造や人口構成から輸送システムや治安機構に至る一般的諸要素の作用⇨の問題も十分に吟味されてきたとはいえない。しかし、例えば黒人ゲート形成をめぐる近年の研究は、都市社会の構造的ダイナミクスが黒人コミュニティや人種関係のあり方に大きく影響したことを明らかにしている。だとすれば本稿でも、反黒人暴動が決して真空状態で生じたものでなかった以上、構造的ダイナミクスの問題を見直す訳にはいかないのである。

このように考えてくると、都市黒人の諸経験を十全な形で歴史総過程に位置づけ理解するためには、以上述べた三つのダイナミクスの作用を念頭におきつつ、分析の枠組を構築しなくてはならないといえよう<sup>(7)</sup>。もとより、その作業は筆者の力量を大きく超えるものだが、さしあたって本稿では、如上の内在的・外在的ダイナミクスの相互作用究明に加えて、近代的都市社会の形成過程において、反黒人暴動延いては黒人コミュニティがその構成要素としていかな

る位置や意義を有したかを特に階級形成の点から問うことで、構造的ダイナミクスの問題にも若干の考察を加えることとした。

註

(1) Elizabeth M. Gelfen, "Violence in Philadelphia in the 1840s and 1850s," *Pennsylvania History* 36 (1969), pp. 381-410; John Runcie, "Hunting the Nigs" in Philadelphia: The Race Riot of August, 1834," *Pennsylvania History* 39 (1972), pp. 187-218; David Grimsted, "Rioting in Its Jacksonian Setting," *American Historical Review* 77 (1972), pp. 361-397; Michael Feldberg, "The Crowd in Philadelphia History: A Comparative Perspective," *Labor History* 15 (1974), pp. 323-336; Feldberg, *The Turbulent Era: Riot and Disorder in Jacksonian America*, New York, 1980; Leonard Richards, "Gentleman of Property and Standing": *Anti-Abolition Mobbs in Jacksonian America*, New York, 1970.

(2) 従来の研究は、暴動参加者⇨理性なき暴徒というル・ボンの先入観を排し、白人暴動参加者の年齢・職業・社会的背景・動機分析を推進した訳だが、黒人有産層が攻撃対象となつたことにふれる以外は、不熟練労働における競争とか空間的「なわ張り」争い、異人種融合への嫌悪とつた、黒人に白人が抱く恐怖や欲求不満が、それらがどの程度現実を反映したかという問題の検討なしに暴動の原因とされてきた。例えば、Grimsted, "Rioting in Its Jacksonian Setting," pp.

アンティスラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ（鶴月）

- 378-380; Richards, *Anti-Abolition Mobs*, chap. 4; Runcie, "The Race Riot of August, 1834," p. 209.
- (8) W.E.B. Dubois, *The Philadelphia Negro: A Social Study*, Philadelphia, 1899. この登場して以来、都市黒人史研究で E. Franklin Frazier, *The Negro Family in Chicago*, Chicago, 1932. による社会学者による研究を出発点に今日まで大きな流れを形づくってきた。その中で外在的タイナミクスに研究の重心がおかれたことは、現実社会での黒人の地位や状態からみて「首肯しうる」が、それ自体としては貴重な研究の一段階だった。問題とするのは「奴隷制の遺産も含め、都市黒人の経験をひきついで「悲劇的同一性」(Gilbert Osofsky, "The Enduring Ghetto," *Journal of American History* 55 (1968), pp. 243-255.) による発想に研究者がとりつかれてきたことだろう。貧困や人種差別の破壊的影響とこうした主題自体は重要ではあっても、黒人自身がそれをどうに意識し対応したかに切り込まなからず右の発想にたじろぐ、黒人の都市生活への適応力欠如とか家族崩壊とこうした結論が直線的に引きだされるからである。尚、都市黒人史の研究でもっと勝れたものとして Kenneth L. Kusner, "The Black Urban Experience in American History," in Darlence Clark Hine ed., *The State of Afro-American History: Past, Present, and Future*, Baton Rouge and London, 1986, pp. 91-122.
- (4) James Borchert, *Alley Life in Washington: Family, Community, Religion and Folklife in the City, 1830-1970*, Urbana Ill., 1980. 題意としてたゞたゞ James

O. and Louis E. Horton, *Black Bostonians: Family Life and Community Struggle in the Antebellum North*, New York, 1979. 都市黒人史研究における伝統的視角への異議申し立てだが、奴隷・奴隷制研究における新観点の登場とともに、黒人史研究全体に転換を迫っていることの重要性もある。後者については「拙稿」書評 G・D・ローウハント「日没から夜明けまで」『史潮』新二二号（一九八七年六月）八六一―九三頁。

- (5) アンティスラム期の都市黒人史研究は、一九七〇年代まで Leon Litwack, *North of Slavery: The Negro in the Free States, 1790-1860*, Chicago, 1961. と Richard Wade, *Slavery in the Cities: The South, 1800-1860*, New York, 1964. を数々のモデルとしたが、その後で「前述のホーランド夫妻の著書を含む」 Ira Berlin, *Slave Without Master: The Free Negro in the Antebellum South*, New York, 1974; Claudia Dale Goldin, *Urban Slavery in the American South, 1820-1860*, Chicago, 1976; David Katzman, *Before the Ghetto: Black Detroit in the Nineteenth-Century*, Urbana Ill., 1976; Leonard P. Curry, *The Free Black in Urban America, 1800-1850: The Shadow of the Dream*, Chicago, 1981. など「現われど本格的な研究深化の段階に入っていた。この時期のフィラデルフィアの黒人コミュニティについては未だまとまった著作はないが、個別テーマについての研究は枚挙に暇なく。例えば Theodore Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia: A Study of Ex-slaves, Freeborn and Socio-

economic Decline," in Hershberg ed., *Philadelphia: Work, Space, Family and Group Experience in Nineteenth Century*, New York, 1981, pp. 368-391; Emma Lapsansky, "Since They Got Those Separate Churches": Afro-Americans and Racism in Jacksonian Philadelphia," *American Quarterly* 32 (1980), pp. 55-78. また「わが国ではこの時期における都市黒人史研究は皆無と見られてきた。黒人史全体の中で、一部の黒人ゲート研究を除けば都市黒人史が個別領域として確立していないという事情とともに、この時期の黒人史研究が制度としての奴隷制とその経済的基盤、奴隷制廃止論などに基本的射程を定めてきたため、北部諸都市の自由黒人への関心が極めて限られていたことが影響している。尚、わが国の黒人史研究の整理としては、竹中興慈「日本におけるアメリカ黒人史研究の史学史的検討」『東京大学アメリカ研究資料センター年報』第七号（一九八四年）四〇―六六頁。

- (6) Kusner, "The Black Urban Experience," pp. 106-112. 近年の都市史研究においても、都市民衆の行動とそれが生じた環境との相互関係を捉えることの重要性が主張されている。拙稿「アメリカ都市民衆の社会史」『アメリカ史研究』第六号（一九八三年）一八一―二五頁。

(7) 三つのダイナミクスの相互作用を問う視角は、基本的には拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義―産業社会の形成と労働者―」『史苑』第四四巻二号（一九八五年）三五―七八頁、の視角を発展させたものだが、それについては Kusner, "The Black Urban Experience" と Lapsansky

nsky, "Afro-Americans and Racism" の他 Hershberg, "The New Urban History: Toward an Interdisciplinary History of the City," in Hershberg ed., *Philadelphia: Work, Space, Family, and Group Experience in the Nineteenth Century*, New York, 1981. など幾つもの研究から示唆された。

## 二、反黒人暴動

フィラデルフィアにおける反黒人暴動は、一八三〇年代に入って突如勃発した訳ではない。一八一九年や二九年にも黒人に対する攻撃事件は生じているし、黒人・白人間の小競合いにいたっては日常茶飯の出来事でもあった。しかし、一八三四年から四九年にかけての一五年間に生じた五回にわたる反黒人暴動は、規模や激しさからみても、それ以降の時期に反黒人暴動が急速に減少した点からみても、暴動勃発の直接の契機はそれぞれ異なるとはいえず、共通の根本的原因と連続性を有するひとかたまりの歴史事象として捉えうると考える。もとより、この共通の原因に前章で述べた視角からメスを入れることが本稿の中心的課題の一つではあるが、本章ではひとまず一連の反黒人暴動の概要を確認したうえで、各暴動に共通する特徴を指摘することとした。尚、これ以降は場合により、反黒人暴動を単に

暴動と記述する。

アンティベラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ(鶴月)

### (一) 反黒人暴動の概要

【一八三四年暴動】 シーダー通りと七番通り交差点の「フライング・ホース」(the Flying Horses) という市無認可の遊戯場を発火点として、八月一二日夜から三夜にわたり市南域からモウヤメンシング地区にかけて展開された暴動<sup>(2)</sup>。この暴動にはいくつかの前兆があった。まず同月八日夜、「フライング・ホース」に屯する黒人青年の一団が白人の消防隊詰所から装備を盗んだことから小規模の乱闘が生じ、続いて九日夜には、黒人コミュニティ指導者の一人 J・フォートンの息子が自宅前の路上で「青い服に麦藁帽子という出立ちの五、六〇人のギャング」に暴行を受けた<sup>(3)</sup>。さらに一二日夜には「フライング・ホース」で黒人と白人の青年グループ間で喧嘩が起り、白人青年数人が負傷し、翌朝には白人が黒人に侮辱されたとの噂が街中に広がっていた。

一二日夕刻、殆どが青少年から成る数百人の群衆が市南域の空地に集結後、「フライング・ホース」へ向かい、これを徹底的に破壊するとともに近隣の黒人たちと乱闘を開始した。さらに白人群衆の一部はシーダー通りや聖メアリー通り沿いの黒人家屋に、ドアを破り窓を割るなどの攻撃を

続けたが、九時すぎに現場に到着した治安当局が暴動参加者のうち一八名を逮捕するなど事態の收拾に努めた結果、一時すぎには混乱は収まった。

一二日夜、警戒にあたっていた治安当局が一〇時すぎに引き揚げて半時間程すると、棍棒や煉瓦を手にした青少年を中心とした約五〇〇人の群衆が、前日同様市南域の空地に集結した。群衆は三つにわかれ、それぞれシベン通り沿いの黒人長老派教会 (the First "African" Presbyterian Church)、スモール通り沿いの居酒屋「潜水鐘」(the Diving Bell)、付近の横町の黒人家屋を襲った。黒人教会は堅固な建物だったので被害は少なかったが、黒人相手の木賃宿も兼ねた「潜水鐘」は跡形もなく破壊された。また、黒人家屋への攻撃も凄じかった。当時の一新聞はその模様の一部を次のように報じている。「想像を絶する。立派な煉瓦造りの家を含む三七軒の家屋が多かれ少なかれ破壊され、多くは全く住めなくなりました。」群衆は抵抗する黒人を殴打し、黒人財産のうち銀製品や金銭は略奪、家具類は叩き壊して路上で焼却した。この襲撃の中で、白人家庭は巻添えとなるのを避けるため窓辺に蠟燭を点し、破壊を免れた。また、白人暴動参加者は Gunner, Punch, Big Gun といった符丁で連絡をとり合ったと記録されている。暴動開始から一時間程たって治安当局が現場に到着、二〇

名の暴動参加者を逮捕したことから事態は平静に向かった。

一四日夜、市長と保安官は壮年団と州兵を動員して警戒にあたった。ところが八時すぎに、ロンバード通り近くの「ハイラム・アフリカン・フリーメーソン支部」(the Hiram African Masonic Lodge) に数百人の武装黒人が集結しているとの噂が広がると、前夜の暴動現場を彷徨っていた白人群衆の間に興奮が巻き起った。群衆は忽ち同支部前に殺到し、壮年団を率いた市長も現場に急行した。武装の事実はなかったものの、同支部内に一〇〇名近くの黒人がいたことからいきり立つ群衆と壮年団の睨み合いが続いたが、黒人が退去したこともあって一二時すぎには群衆は退散した。一方、この晩には二番通りのホートン市場近くの黒人礼拝所からの発砲で白人少年二名が負傷したとの噂も流れていたが、一〇時すぎにはこの礼拝所が白人の集団に襲われた。暴動参加者は柱を切り、梁にロープをかけて礼拝所を引き倒した。壮年団が現場に到着した時には「近隣の人たち以外には誰も居らず、その人たちは破壊が慎重に行なわれ、襲撃者たちは目的を遂げると静かに歩いて帰ったと証言した」という。この晩を最後に三四年暴動は収束したが、結局この暴動では二名の黒人が死亡(一名は身体障害者で殴打されたことが元で死亡、一名はスクールキル川を泳いで逃亡中に溺死)、多数の負傷者がでた他、少なくとも

も数百に及ぶ黒人家屋が攻撃を受けたと見積られている。

息子が襲われた J・フォートンは、自らも被害脅迫を受けて市当局に保護を求め、デラウェア川対岸には数百の黒人難民のテントが立ち並んだという。

【一八三五・三八年暴動】三四年暴動以降、一八三〇年代に黒人コミュニティは少なくとも二度にわたって攻撃を受けた。一八三五年七月一三日から翌日にかけて、ある西インド人奉公人が主人を斧で撲殺するという事件を契機に生じた暴動と一八三八年五月一八日の「ペンシルヴェニア・ホール」<sup>(4)</sup> 焼打ち暴動に付随して、翌日・翌々日に生じた暴動である。三四年暴動に比すれば、これらの暴動では死者もなく被害も大きくはなかったが、三五年暴動ではロンバード通り沿いの通称「レッド・ロー」(Red Row) という黒人街、シベン通りの白人女性数人を囲う黒人の床屋、パシユンク通り沿いの煉瓦造り黒人家屋一二軒などが攻撃を受け、三八年暴動では市内の「フレンド会有色人孤児院」(the Friends Shelter for Colored Orphans) とロンバード通り沿いの黒人教会が襲撃された。

【一八四二年暴動】モウヤメンシング地区の黒人禁酒協会が、ジャマイカでの奴隷解放記念日を祝して行なったパレード<sup>(5)</sup> がもとで、八月一日・二日両日にわたって生じた暴動である。一日昼前、モウヤメンシング地区の黒人禁酒ホ

ーン (the Colored Temperance Hall of Moyamensing) を出発したパレードが、シペン通りのワシントン市場にさしかかると、市場にいたアイルランド人たちが、果物や敷石を投げつけたことから乱闘が生じた。黒人たちは昇りくる太陽を背に自らの鎖を引き切切る黒人を描いた旗を掲げていたが、後にアイルランド人たちはこの旗が白人の焼死をイメージさせたと言っている。壮年団が現場に到着したことから、この乱闘は一旦収まったが、正午すぎに黒人家屋からの発砲で白人青年二名が負傷したことから再び騒ぎが生じた。一、〇〇人以上の怒り狂った群衆が発砲事件のあった聖メアリ通り周辺に殺到、必死で制しようとする壮年団を圧倒すると、黒人との乱闘と並行して周辺の黒人家屋を攻撃した。この争いは夜に入っても続き、九時すぎに白人群衆はロンバード通り沿いの「スミス互助ホール」(the Smith Beneficial Hall) と聖メアリ通りの黒人教会 (Second "African" Presbyterian Church) を襲い、火を放って灰燼に帰せしめた。また、この晩には前述の黒人禁酒ホールも二度にわたって攻撃を受けた。

二日早朝、棍棒などを手にしたアイルランド人港湾労働者の一団が、スクールキル港の石炭置場周辺で出勤途中の黒人たちに暴行を働き始めた。知らせを聞いて駆けつけた保安官と壮年団は、集ってきた数百の白人群衆に駆逐され

燃物を満載した荷車に火を点け、聖メアリ通りから一路「カリフォルニア・ハウス」に向かった。沿道の黒人住民は煉瓦や石を投げつけて行手を阻まんとしたが失敗し、「殺し屋」は防備にあたる黒人を押し切って酒場内に乱入、家具調度品を破壊した後、ガス栓を開いて火を放った。この結果、「カリフォルニア・ハウス」と隣接五家屋が全焼した。その一方で、聖メアリ通りでは「殺し屋」と黒人住民との乱闘が発生した。駆けつけた壮年団は武装した「殺し屋」に素手では抗すべくもなく、午前二時すぎにやっと州兵が現場に到着したことから騒ぎは収まった。

一〇日早暁、州兵が帰還すると暴動が再発した。白人群衆は聖メアリ通りの黒人家屋に放火、消火にあたる消防隊と黒人住民と三つ巴の争いを展開した。午前一〇時すぎになって州兵が出動し、「カリフォルニア・ハウス」焼跡前に二門の大砲を据えて周辺を封鎖したことから事態は平静へと向かった。結局、四九年暴動では、三人の白人(消防隊員二名と窓から顔を出して銃殺されたアイルランド人少年)と黒人一名が死亡、白人九名と黒人一六名が重傷を負った他、三〇軒以上の建物が全焼した。

## (二) 反黒人暴動の特徴

以上、その概要を検討してきた反黒人暴動にはいくつか

た。群衆は黒人と乱闘を行なう一方で、周辺の黒人家屋を攻撃した。市長は午後一時に州兵の出動を要請し、これにより騒ぎはしだいに収まった。一方、翌三日にモウヤメンシング地区大陪審は、前述の黒人禁酒ホールを検分し、「このところの人のびとの感情の高まり」からみてこの建物は「迷惑」だとの結論を下し、取り壊しを命じている。<sup>(6)</sup>

【一八四九年暴動】モウヤメンシング地区の街頭ギャング「殺し屋」(the Killers) が、同地区の酒場「カリフォルニア・ハウス」(the California House) を襲撃したことから、一〇月九日夜から翌朝にかけて生じた暴動。<sup>(7)</sup> 「殺し屋」は三〇〇人の構成員を誇るアイルランド人の組織で、同地区のアイルランド人プロテスタントの「フランクリン消防隊」(the Franklin Hose Company) と日常的に激烈な争いを展開する一方で、黒人への敵意を剥出しにしていた。「カリフォルニア・ハウス」は賭博室を備えた黒人の溜り場で、主人は白人女性を妻に迎えて間もないムラトイだった。同年八月末、「殺し屋」は「カリフォルニア・ハウス」の外壁に銃を乱射し、これに黒人が応戦する中で「殺し屋」側に五人の負傷者がでた。この際は、治安当局が「殺し屋」の首魁を逮捕し、黒人側の武器を押収したことで事態は収まった。<sup>(8)</sup>

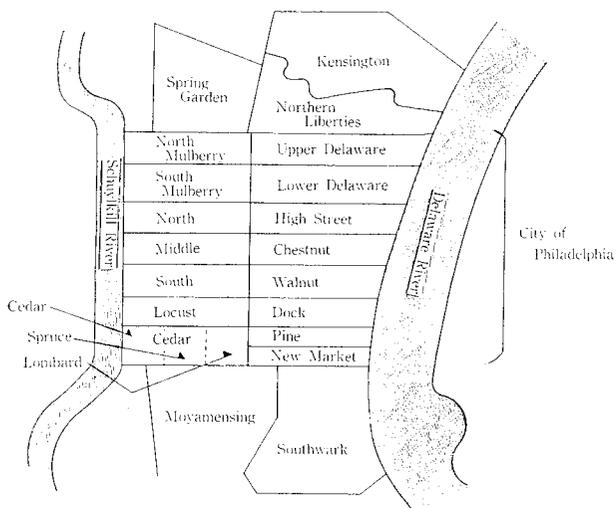
争いの再燃が噂される中、一〇月九日夜「殺し屋」は可の共通する特徴を指摘することができよう。第一には、白人暴動参加者の行動形態に暴力の抑制的使用、攻撃対象の限定といった性格がみられることである。確かに史料によつては暴動参加者の残忍さや反理性的行動を強調するものもあるし、黒人を殴打し教会を包む炎を喜々として見詰める群衆の表情に、ル・ボンいうところの「暴徒」のそれを見出すことも決して不可能ではないかもしれない。しかし、五回にわたる暴動の内容を綿密に検討すると、攻撃対象は総じて人体そのものよりも、黒人の財産ないしはコミュニティ組織に向けられていたと結論づけられる。<sup>(9)</sup> しかも、攻撃自体も決して場当たりのものではなく、地域社会の支援の下で一定の計画性をもってなされており、破壊行為も手際よく実行されている。例えば、三四年暴動では、第一夜、第二夜とも暴動参加者は一旦市南域の広場に集結しており、おそらくそこで攻撃対象の選定や符丁(協調行動や治安当局到来の警告に用いたと考えられる)の確認がなされたのではなからうか。また、三四年暴動だけでなく三五年暴動にもみられた、窓辺に蠟燭を点すという白人家庭の行為は、巻添え防止策であるとともに、暴動参加者への共感を示すものとも考えられるし、四二年暴動におけるように、暴動中途で忽ち数百の群衆が攻撃に加わる事実は、暴動参加者が決して地域社会内で孤立した存在ではなかった

ことを表わしているといえよう。この点を敷衍すれば、暴動参加者は地域社会の利害を代弁しつつ行動したとも考えられるのである。<sup>(10)</sup> こうした行動形態の性格は、暴動参加者が破壊行為の背後に存在する願望や目的を達成する手段の一つとして集団的暴力を用いたことを示しており、だとすれば暴力行使の動機を単に漠然とした、非合理的な人種差別感情に求めるだけでは不十分なことを示唆しているといえよう。

第二の特徴としては、白人暴動参加者の社会構成があげられる。これを正確に知ることは史料的に極めて難しいが、参加者の大半が暴動現場近辺の居住者だったこと、職業の点では必ずしも圧倒的優位を誇るものはないものの、概して港湾労働者や建設業労働者、織布工などが多くみられることは指摘しうる。居住地については、地理に精通しているとは思えない暴動参加者の行動経路からみても、近隣在住者が大半を占めたことは容易に想像がつくが、例えば三四年暴動の逮捕者一八名中一五名までが「フライング・ホース」を中心とする半径一キロ以内の地域の居住者である。<sup>(11)</sup> また、職業については、例えば三四年暴動初期段階の逮捕者のうち八名の職種が判明するが、それらは織布工三名、不熟練労働者二名、家具職人、塗装工、石灰製造工各一名となっている。<sup>(12)</sup> 次に年齢の点では年長者は殆どみられ

ず、当時の新聞の描写を借りれば「従弟や年端もいかぬ少年たち」「社会最下層の若者たち」が大部分を占めており、屢々アポリシヨニスト襲撃暴動や反黒人暴動に結びつけられる「地位も財産もある紳士たち」の存在を確認することはできなかった。つまり、白人暴動参加者の大多数は地域の若年労働者層から引きだされたと考えられる訳であるが、同時に四二年・四九年暴動に顕著なように、アイルランド人がかなり存在したこと、街頭ギャングが少なからず関与したことも指摘しておかなくてはならないだろう。<sup>(13)</sup>

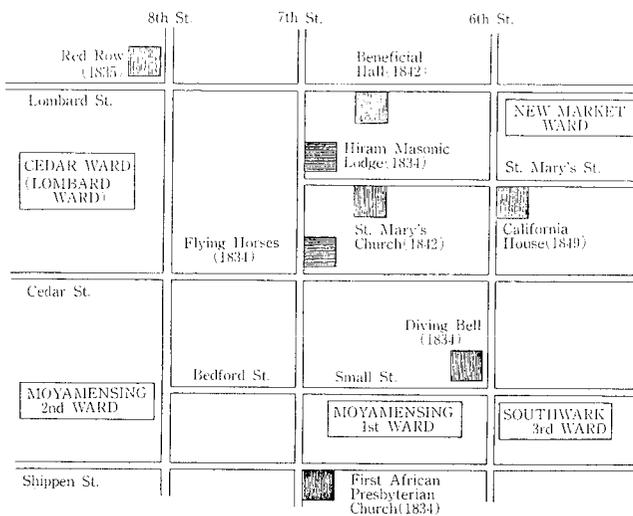
第三の特徴としては、暴動参加者の攻撃対象が、市南東部からモウヤメンシング地区北東部およびサウスウァク地区北西部にかけての地域に集中していることがあげられる。地図IIは、場所が確定できる主要攻撃対象を表示したもののだが、これからも判るように、一五年という期間における暴動の攻撃対象は、たかだか〇・五キロ四方内に収まるといふ驚く程の空間的集中をみせているのである。同時に攻撃対象が教会や互助ホール、黒人フリーメーソン支部や禁酒ホール、居酒屋や遊戯場など黒人のコミュニティ生活の中心となる組織や建物、さらには「財産ある黒人たち」<sup>(14)</sup>の煉瓦造りの家屋や家財に基本的に限定されていたことにも注目したい。<sup>(15)</sup> 裏返すならば、暴動の生じた地域―シーダー通り周辺地域―では、黒人コミュニティがかなりはつきり



地図I：フィラデルフィア市および周辺地区概略図(1850年当時)

(S. B. Warner Jr., *Private City*, p. 48 などから作成)

\*フィラデルフィア市は、1854年の市・郡統合までは、15の区から成る市部と29の独立した行政区画区によって構成された。(1840年代は Cedar 区は Cedar, Spruce, Lombard の3区に分隔された)本図では、市街地の連続性という点から、上記地図に示した地塊をフィラデルフィアと見做すこととする。



地図II：反黒人暴動(1834年, 35年, 42年, 49年)における主要攻撃対象

(F. Lapanovsky, "Since They Got Those Separate Churches": Afro American and Racism," p. 59 および T. Sharf and T. Westcott, *History of Philadelphia*, 1 のほか新聞史料から作成)

とした形でそのありようを示していたことにもなる。もとより、こうした第三の特徴は先に述べた第一・第二の特徴と深い関連を有したと考えられるが、それでは黒人コミュニティの何が、白人暴動参加者を一五年もの長きにわたって執拗に行動へと駆りたてたのだらうか。この問題を解くことは、まさに黒人コミュニティをめぐる内在的ダイナミクスと外在的ダイナミクスの交差点を探ることに他ならぬ。

註

- (1) Edward Raymond Turner, *The Negro in Pennsylvania: Slavery, Servitude-Freedom, 1639-1861*, rpt. of 1911, Washington D.C., 1969, pp. 144-145; Thomas Scharf and Thompson Westcott, *History of Philadelphia, 1609-1884*, 3 vols., Philadelphia, 1884, I, p. 624.
- (2) 三四年暴動の叙述については以下の史料に依った。Samuel Hazard ed., *Register of Pennsylvania*, Philadelphia, 1828-1835, Aug. 23 and Sept. 27, 1834; H. Niles ed., *Niles' Weekly Register*, 4th Ser., vol. 11, Aug. 16, 23, 1834; Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, pp. 637-638; Edward S. Abdy, *Journal of a Residence and Tour in the United States of North America: From April, 1833 to October, 1834*, 3 vols., rpt. of 1835, N.Y., 1969, III, pp. 319-320.
- (3) この際「襲撃者たちは「無心坊主ゆきや」の中心」なる

一日に集結を約すのを耳にしたフォートン家の隣人が市長に通報し、集結地点を待ちうけていた治安当局により七人のキヤンダグが逮捕された。Abdy, *Journal*, III, pp. 319-320.

(4) 三五年暴動については Hazard, *Register of Pennsylvania*, Aug. 1, 1835; Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, p. 642. 三八年暴動については Ogden Niles, ed., *Niles' National Register*, May 26, 1838; Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, p. 651.

(5) 四二年暴動の叙述については以下の史料に依った。Niles' *National Register*, Aug. 6, 1842; Philadelphia *Public Ledger*, Aug. 2, 3, 6, 1842; Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, p. 662. 黒人のヘンリーが掲げていた旗は後日市長官邸に陳列されたが、それには次のような字句が書かれていた。「なんと壮大な寿命を持ち、真から美しうか。神聖なる友情、愛情、そして真理は。フレイマニオン青年自警連合」*Public Ledger*, Aug. 4, 1842.

12

- (6) *Public Ledger*, Aug. 22, 1842. 実際はこの建物は取り壊された。また「互助ホール」の持主は郡条例をたてて、キウヤメンシント地区行政委員会に補償を要求した。しかし同委員会は黒人のヘンリーが興奮を引き起こしたとしてこれを却下し、大陪審も後に黒人のヘンリーが暴動の原因と断定。黒人以後は「ヘンリーを自衛し」教会も「興奮の原因」を避け「やく」々方々に罪を問わぬよう勧めた。Nicholas B. Wainwright ed., *A Philadelphia Perspective: The Diary of Sidney George Fischer, 1834-1871*, Philadelphia, 1967, p. 135; John M. Werner, "Race Riots in

delphia, 1980, p. 224.

(13) 三四年暴動では「逮捕者の中には Cavanaugh, McKernan, McLaughlin などのアイルランド人を思わせる名前がちらちら」。

(14) *Commercial Herald*, Aug. 15, 1834. (Runcie, "The Race Riot of August, 1834," p. 209, 45)

(15) 例えば三四年暴動では「二日目に破壊された家屋の多くが「堅固な煉瓦造り」で、同じ通りの木造家屋には攻撃は集中してゐる」。Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, p. 638.

三、黒人コミュニティ

黒人著述家 J. W. ウィルソンは、一八四一年に出版した『フィラデルフィア有色人社会と上流階級の素描』において、世間が「有色人を社会的ないしは諸々の点で卓越性のないひと固まりの集団と見做し続けてきた」ことを批判し、「財産ある人びと、有閑紳士たち」がコミュニティの指導層として、洗練された生活を送り多彩な社会活動に従事する姿を描いた。しかし、ある意味で彼は、エリート層の存在を強調することで、大多数の黒人が「墮落と悲惨と貧困のどん底」に喘ぐという黒人コミュニティの現実を炙りだしたともいえよう。本章では、こうした黒人コミュニティ

13

- (10) 参加者の行動が計画的であることは、符丁が用いられたことや新聞報道の描写からしても、参加者の中心にギャングや消防隊が関わった可能性を示唆している。しかし、そうした人物と並んで暴動を構成したいわゆる「観衆」の存在は無視できない。暴動の目的には共感しても、全面的に攻撃に関与はしないこれら「観衆」は、歓声をあげたり治安当局の妨害をすることで暴動を一種の「街頭劇」に仕立て上げた。四九年暴動ではこの「観衆」が殆ど存在せず、そのことが死傷者を多くした原因だった。この点については、拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」七四頁。
- (11) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Aug. 23, 1834.
- (12) Bruce Laurie, *Working People of Philadelphia*, Phila-

表I：フィラデルフィア郡における白人・黒人人口の推移  
\* は黒人人口が郡内総人口に占める割合

年	白人(増加率)	黒人(増加率)	*
1810	111,240人	10,552人	9.4%
1820	135,637 (22%)	11,891 (12%)	8.7%
1830	188,797 (39%)	15,624 (31%)	8.2%
1840	258,037 (36%)	19,833 (27%)	7.6%
1850	408,762 (58%)	19,761 (-0.4%)	4.8%
1860	565,529 (38%)	22,185 (12%)	3.9%

(W.E.B. DuBois, *The Philadelphia Negro*; U.S. Census Office, *Fifth Census of the United States, 1830*; U.S. Census Office, *Sixth Census or Enumeration of Inhabitants of the United States: 1840*; U.S. Census Office, *Seventh Census of the United State: 1850*; U.S. Census Office, *Population of the United States in 1860: Compiled from the Originated Returns of the 8th Census.* より作成)

表II：フィラデルフィア市および周辺地区における黒人・白人人口の推移  
A：各地域に占める黒人人口の割合 B：各地域毎の黒人人口分配率

	1830				1840			
	黒人	白人	A(%)	B(%)	黒人	白人	A(%)	B(%)
市北部	1323	22405	5.6	9.2	1332	25844	4.9	7.3
市中南部	1886	22970	7.6	13.1	1772	25176	6.5	9.7
小計	9723	70656	12.1	67.5	10507	82635	11.2	57.6
市周辺北部	1658	51746	3.1	11.5	2787	81024	3.3	15.2
市周辺南部	3007	24396	10.9	20.9	4947	37169	11.7	27.1
総計	14388	146798	8.9	100.0	18241	200828	8.3	100.0

	1850			
	黒人	白人	A(%)	B(%)
市北部	1172	33593	3.3	6.6
市中南部	1249	32557	3.7	7.1
小計	10736	110640	8.8	60.7
市周辺北部	2966	149925	1.9	16.8
市周辺南部	3981	61797	6.0	22.5
総計	17683	322362	5.2	100.0

市周辺北部 (Spring Garden, Northern Liberties, Kensington)

市周辺南部 (Moyamensing, Southwark)

(表Iと同じ典拠より作成)

市北部 (North Mulberry, South Mulberry, Upper Delaware, Lower Delaware)  
 市中部 (North, Middle, South, High Street, Chestnut, Walnut)  
 市南部 (Locust, Cedar, Dock, Pine, New Market)

アンティベラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ(鶴月)  
 についてまずその全体的特徴を明らかにしたい。続いて、黒人コミュニティの中心であり、暴動頻発地域でもあるシーダー通り周辺における同コミュニティのありようを検討し、さらにこのありようと反黒人暴動の関係について考察を加えることとしたい。

(一) 黒人コミュニティの特徴

表Iからもわかるように、フィラデルフィア郡内の黒人総人口は一八一〇年から六〇年まで、四〇年代の微減を別とすれば絶対数では順調に増加している。特に一八二〇年代・三〇年代には三〇%前後の増加率を示している。これが自然増に加えて、州内外からの自由黒人や逃亡奴隷流入の結果だったことはいうまでもない。一方、郡内白人人口は、国内農村部からの継続的人口流入と一八四〇年代後半を頂点とするアイルランド人主体の海外からの移民流入によって、半世紀間に五倍という驚異的增加を示している。この中で郡内総人口に占める黒人人口の割合は、一八一〇年の九・四%から六〇年の三・九%へと低下している。つまり、黒人人口は絶対数では増加の基調にありながら、相対的には小さな存在となっていくのである。

次に表IIからフィラデルフィアにおける黒人の人口分布をみると、黒人は全ての地域に居住しているもの、とり

わけシーダー通りを挟んだ市南部(ロウカスト区、シーダー区、ドック区、パイン区、ニューマーケット区)と市周辺南部(モウヤメンシング地区、サウスウァーク地区)に集中していたことがわかる。この地域に居住する黒人のフィラデルフィア黒人総人口に占める割合は、一八三〇年〓六六・一%、一八四〇年〓六七・七%、一八五〇年〓六九・五%となる。この地域は、黒人・白人各会派の教会記録から信者の居住分布を割り出したN・J・ジョンストンが、黒人の「飛び領土」と呼んだ地帯にほぼ重なる<sup>(3)</sup>。彼の研究によれば、黒人のこの地域への集中は一七九四年にロンバード通りに「ベセル・アフリカン・メソジスト監督教会」(Bethel African Methodist Episcopal Church)が建設された頃始まり、一八一一年には「飛び領土」はかなりはつきりしたものと成り、一八三〇年代には密集度を強めつつ西へ拡大した。つまり、この地域で黒人コミュニティは、一九世紀初頭以降空間的にかなりはつきりした存在となったというのである。

しかし、注意すべきなのは確かにこの地域に黒人は集中したもの、人口の圧倒的部分とはなっていない点である。ジョンストンは単に信者の居住分布から「一九世紀初めには人種に基づく居住隔離がフィラデルフィアのパターンになった」と結論づけているが、表IIからもわかるように、

黒人がこの地域の総人口に占める割合は、市南部では一八三〇年一〇・五％から一八五〇年一五・七％、市周辺南部では一八三〇年一〇・九％から一八五〇年一六％へと低下している。無論、より本目細かな分析が必要だが、前章で検討した反黒人暴動時の状況からみても、この地域が居住隔離という表現から想像される、黒人が圧倒的多数を占める居住区とはいえないかった点は、次節との関わりからも指摘しておきたい。<sup>(5)</sup>

一八三七年に「ペンシルヴェニア奴隷制廃止協会」(the Pennsylvania Society for Promoting the Abolition of Slavery) は「フィラデルフィア市および周辺地区の自由黒人の状態とその改善の能力および方策を明らかにする」ために社会調査を実施した。<sup>(6)</sup> これによると、黒人コミュニティ全体の財産総額(動産・不動産の総評価額)は九七七、四八五ドル、家族総数は三、六五二となっているから、単純計算では一族あたりの財産総額は平均二六八ドルとなる。<sup>(7)</sup> しかし、T・ハーシバークの研究によれば、実際に平均以上の財産を所有した家族は全体の二〇％に満たず、六〇％の家族は財産総額六〇ドル以下にすぎなかった。<sup>(8)</sup> 一八四七年にクエーカー教会が行なった社会調査をみても、黒人家族のうち不動産を所有したのは全体の七％たらずに留<sup>(9)</sup>っている。こうした数字は黒人コミュニティが全体として

極めて貧しかったことを示すとともに、コミュニティ内に大きな経済的不平等が存在していたことを示唆している。実際、一八三八年と四七年の両時点で、黒人コミュニティでは富裕な一〇％の人口が富の七〇％を、最富裕の一％が富の三〇％を所有していたのである。<sup>(10)</sup>

一八六〇年時点でのフィラデルフィア全住民についてみると、富裕な一〇％の人口が富の八九％を、最富裕の一％が富の五〇％を所有していたから、著しい経済的不平等の存在は決して黒人コミュニティ特有のものではなかった。<sup>(11)</sup> つまりアンティベラム期フィラデルフィアでは、人種に関わりなく少数の富裕な者が多数の貧しい者の中で際だつた存在だった訳である。しかし、ここで注意すべきなのは黒人コミュニティ富裕層の際立ち方が独特だったことである。さしあたりそれは次の三点に整理できよう。第一には、黒人コミュニティ指導層が専らこの富裕層から引き出されたこと、第二には黒人コミュニティ指導層が地域レヴェル・全国レヴェルの黒人の運動に積極的に関与したこと、第三には彼らの多くが先に述べたシーダー通り周辺の黒人集中地域に居住したことである。白人上流階級は、家柄や自らの労働によらない富を支配の正当性の根拠として、社会全体に対して権力を行使した。<sup>(12)</sup> これに対して黒人富裕層は、少なくとも南北戦争までは公職に就くことすらできず、社

会全体の権力機構から排除された。また、彼らの富は他人からの搾取ではなく、基本的には自らの労働の産物だった。<sup>(13)</sup> こうした彼らが黒人コミュニティ内での威信や権力を求める時、それは家柄とか富そのものよりも個人的資質、つまり尊敬されうる生活や差別に晒される黒人コミュニティ全体に責任をもって対応する意識や能力によって決定された<sup>(14)</sup>と考えられる。ここに富裕層の多くがコミュニティ指導層として積極的に活動した背景があると思われるが、フィラデルフィアの黒人コミュニティの特殊性―規模や富の大きさ、歴史の古さと安定性、白人からの援助―がさらにそれを増幅させた。<sup>(15)</sup> しかも、富裕層の多くがシーダー通り周辺に居住したことは、黒人内の経済的不平等の存在を可視的なものとし、彼らの生活や活動を一層際立たせることになったと考えられるのである。

最後に、職業構成の点から黒人コミュニティの特徴を確認しておきたい。一八三七年の社会調査報告が「黒人の大部分は厳しい肉体労働に従事している」と嘆いたように、少数の知識労働者や手工業者を除けば、黒人の大半は建設現場や波止場を中心とした不熟練労働に携わった。一八四七年の社会調査が男性三、三五八人、女性四、二四九人(ともに二一歳以上の就労可能人口の五分の四)の職業を明らかとしているので、その内訳を百分率で示せば次の通

りである。<sup>(16)</sup> 男性、不熟練労働者四七％、ウェイター・コック一六・六％、手工業労働者八・五％、車夫・御者八・二％、水夫七・一％、小売業従事者四・九％、理容師四・六％、その他三・一％。女性、洗濯婦四六％、日雇い仕事従事者一八・五％、針子一一・四％、家内労働者六・八％、小売業従事者五％、コック四％、賄い婦三・六％、廃品回収業従事者二・四％、その他二・三％。上のその他の範疇には、男性では楽師(三二人)、説教師(二一人)、放血療法師・医者・歯医者(一九人)、教師(一人)が、女性では教師(二人)などが含まれている。

これ以外にも、女性の場合には白人家庭に住み込む家内奉公人が夥しい数にのぼった。一八三七年の社会調査報告の挙げる五、〇〇〇人という推計は根拠が脆弱だが、黒人の人口構成における男性数に対する女性数の甚だしい超過は、家内奉公における黒人女性への需要の大きさを示すものと考えられる。一八三八年から一八六〇年の間に、黒人男性一、〇〇〇人あたりの女性数は一、三二六人から一、四一七人に増加している。(一八六〇年の白人について同様の数字は一、〇八八人)<sup>(18)</sup> 一八八〇年には、黒人成人五人のうち一人が家内奉公人として白人家庭で働いたという。<sup>(19)</sup> 女性数の甚だしい超過という事実は、黒人男性の雇用機会<sup>(17)</sup>の少なさに黒人男性の移住が鈍らされた結果ともいえる訳

で、とりわけ黒人男性への雇用上の人種差別が時とともに強まったことを示すと考えられる。

雇用上の人種差別について考える際に重要なのは、それが工業化の進展と白人移民の増加という背景の中で生じたことであろう。一八四七年の社会調査報告は、黒人手工業労働者の中に一定の社会的上昇を遂げたもののいたことを示唆しているが、工業化の進展による手工業労働自体の没落と雇用上の人種差別強化という状況の中で、黒人手工業労働者は技術を使用する機会を狭められていく。

一八三二年には、黒人手工業労働者の二三%が社会の「偏見」のために職に就けなかったが、一八五六年にはその割合は三八%にも達するのである。<sup>(22)</sup>一方、従来はほぼ独占してきた不熟練労働のいくつかの分野でも、黒人はアイルランド人との競争に敗れていく。一八四七年の社会調査報告では、黒人男性労働者に占める石炭運搬夫と沖仲仕の割合は五%を記録したが、一八五〇年センサスによれば一%を占めるのみとなっている。<sup>(23)</sup>波止場や建設現場では、「数年前には黒人しか見出せなかったが、今やアイルランド人以外を目にすることはできない」という状況すら出現することとなる。<sup>(24)</sup>さらには、工業化が提供する工場労働という新たな就業機会からも黒人は排除された。一八四七年時点で、黒人男性労働者のうち工場労働に従事するのは、〇

・五%にすぎなかったのである。<sup>(25)</sup>

以上で確認してきた相対的な人口減少、緩やかではあるが着実な居住隔離の進行、全体的な貧しさと著しい経済的不平等の存在、雇用上の人種差別強化をみるなら、黒人コミュニティのおかれた状況が極めて厳しかったことは明白である。しかし、こうした悲観的側面に目を奪われるあまり、黒人コミュニティのもう一つの側面、即ち黒人自身が状況を改善し自らを向上させんとする努力に彩られたコミュニティ生活の存在を無視してはならないだろう。

## (二) シーダー通り周辺

前節でも示唆したように、シーダー通り周辺にはフィラデルフィアの黒人の約六割が集中したが、住民の大半を黒人が占めた訳ではなかった。同時にS・ブルーミンの研究が示すように、この地域はフィラデルフィアでも最も貧しかった。また、犯罪発生率も最高だった上に衛生環境も劣悪で、一度伝染病が流行すれば常に最悪の被害を受けた。<sup>(26)</sup>一八二九年に慈善家M・ケアリは、この地域を「世界でも類をみない苦しみ」と形容したが、まさにシーダー通り周辺は「大いなる悲惨と貧困が存在する」場だったのである。<sup>(27)</sup>一八四七年の社会調査報告によれば、東西を五番通りと八番通り、南北をシーダー通りとフィツウォーター通りに

囲まれた地域に居住する三〇二の黒人家族のうち、なんらかの動産を所有するのは一七六家族にすぎず、その動産平均所有額は三ドル四三セントだったという。特にベドフォード通りや聖メアリ通りなどの裏街には、「最下層の最も墮落した白人種(白人と黒人―筆者)の雑居集団」が薙きあっていた。<sup>(28)</sup>フレンド教会の調査員は、ベドフォード通りの模様について次のように述べている。「目に映るもので心は痛み魂は震えあがる……例えば、アイルランド人が家を借り道路側の部屋を自分の店として使い、残りの部屋を有色人に賃貸しする。その(アイルランド人の)店は有色人間借り人たちに薪だけでなくラム酒も供給する……店主はラム酒を誰にでも売る訳でなく、最愛の仲間である可哀想な有色人という特別の顧客にだけ商うといった具合だ。」この調査員はシペン通りの模様についても述べる。「七番通りと八番通りに挟まれたシペン通りには大変に堅実な有色人たちがいる。しかし、大多数は惨めな人びとだ……貧困の大きな原因は耐えられない程高い家賃なのだ。」<sup>(29)</sup>

一八四七年の社会調査報告もシーダー通り周辺の間借り人や借家人の苦痛にみちた暮し向きを詳しく伝えている。<sup>(30)</sup>こうしてみる時、このシーダー通り周辺は、E・ラプサンスキーが綿密な分析の結果定義づけたように、人種的・民族的に多様な労働者階層の間借り人・借家人が圧倒的の多

数を占めた世界だったといえよう。<sup>(31)</sup>しかし、「大いなる悲惨と貧困」が支配したこの地域において、ロンバード通りを中心に、J・フォートンら黒人コミュニティ指導層の満洒な住宅や一定の社会的上昇を遂げた黒人たちの煉瓦造り家屋がみられたこと、さらにはこの地域の地主の中には少数ながらも黒人が存在したことの二点には注意を促しておきたい。<sup>(32)</sup>つまり、先にもふれたように、シーダー通り周辺においては、経済的不平等の存在がはっきりと目で見、肌で感じられるものだったのである。

物質的貧困は人種・民族に関わりなく、この地域の住民の殆どにとって共通の現象だったが、コミュニティ組織については状況は全く異なった。反黒人暴動の攻撃対象も示すように、この地域には数々の黒人の組織が集中したが、実際シーダー通り周辺こそ、教会、学校、相互扶助協会、フリーメイソン支部、文芸協会、黒人新聞集配所などの組織網が整備された、フィラデルフィア黒人コミュニティの中心だったのである。この地域には、一八四七年までに六つの黒人教会と四つの礼拝所、二つのフリーメイソン支部、二〇を超える各種の学校、夥しい会員を擁する相互扶助協会、文芸協会、図書室などが存在した。<sup>(33)</sup>こうした組織が、黒人住民の多様な要求に答えるものだったことは言うまでもない。例えば、生活防衛の要求に支えられた相互扶助協

会をみると、フィラデルフィア全体でその数は、一八一一年に一一、一八三一年に四三、一八三七年に一一九、一八四七に一〇六にのぼり、一八四七年には七六の組織のべ五、一八七人の会員を有している<sup>(34)</sup>。

「聖トマス・アフリカ人友愛協会」(the African Friendly Society of St. Thomas) とか「アレンの息子連合」(the United Sons of Allen) といった名称が示すように、相互扶助協会の大多数が黒人教会を生みの親としたが、他のコミュニティ組織も教会とならぬかの関わりを持った。実際、黒人教会はコミュニティ組織網の要に位置したのである。白人社会におけるような、卓越した政治家や商人、専門職従事者が殆ど存在しなかった黒人コミュニティでは、指導力や財政力に恵まれた唯一の存在である黒人教会が、コミュニティ組織創設の中心となった。このことは教会の指導権や価値観が、宗教的領域に留まらず黒人コミュニティ全体に及ぶという状況をもたらしした。そして、教会とそれを中心とした諸組織が、コミュニティ指導層を育くむ場となったのである<sup>(35)</sup>。

一方、シーダー通り周辺の白人諸集団は黒人と同じようなコミュニティ組織を創造しえなかった。この理由のひとつには、この地域の白人が一〇年間で七〇%近い他地域への移動率を持っていたことがあげられる<sup>(36)</sup>。つまり、公共サ

職人層中心の組織へ変質した。隊員にとって消防隊は、娯楽・友愛の場であるとともに、民族的・宗教的帰属意識確認の場でもあった。火事場での消防隊間の乱闘は日常茶飯の出来事であり、一八四〇年代に入り消防隊間の民族的・宗教的相違が一層明確化すると、その争いも熾烈を極めた<sup>(38)</sup>。一方、一八四九年暴動と深く関わった「殺し屋」を含め、シーダー通り周辺の街頭ギャングは一八四〇年代までに少なくとも一〇を数えた。ギャングも若年労働者を主体としたが、「めったにこそ泥や夜盗は働かない」彼らの行動基準は、男らしさの誇示や仲間意識の確認だった。ギャングにより消防隊が乗っ取られたり、両者が癒着する場合も多く、「殺し屋」は「モウヤメンシング消防隊」(the Moya-mensing Hose Company) を、「用心棒」(the Bouncers) は「ウェカコウ消防隊」(the Weccacoe Hose Company) を手中に収めた。シーダー通り周辺最大のギャング「殺し屋」はモウヤメンシング地区北東域を根城とし、西方ではアイルランド人プロテスタントの「刺客」(the Singer) や「フランクリン消防隊」と、東方ではアメリカ生まれアメリカ人プロテスタントの「シフラー」(the Schiffer) や「シフラー消防隊」(the Schiffer Hose Company) と激烈な縄張り争いを行なった<sup>(39)</sup>。

同時代人たちは消防隊やギャングによる暴力や騒乱の原

ーヴィスから排除され社会的上昇から見放された黒人住民が、シーダー通り周辺での快適かつ安定した生活を求め、持続性をもった組織を欲したのに対し、必ずしもこの地域を永住の地とは考えず、曲りなりにも公共サーヴィスの受益者であった白人諸集団にとっては、コミュニティ全体に支えられた組織創設の必要は差し迫ったものではなかったといえよう。無論、社会的・経済的には黒人に類似した位置にあったアイルランド人の場合は、事情は多少異なり、コミュニティ組織の必要性は痛感されていた。しかし、一八三〇年代末まで市周辺南部にはカトリック教会すら建設しえなかった事実が示すように、アイルランド人は社会的・経済的・政治的に十分な力量を備えたコミュニティを形成するには至っていなかったのである。アイルランド人コミュニティが教区制度を整え、プロテスタント社会と並行した形で社会組織を本格的に整備するのは、一八四〇年代中頃以降のこととなる<sup>(37)</sup>。

シーダー通り周辺において、白人諸集団が求めたのは、民族性や社会的・職能的集合性に基づく自律的組織だった。この地域がフィラデルフィアでも有数の志願制消防隊や街頭ギャング跳梁の地となった理由もここにある。一八三〇年代に入るまでに、消防隊は旧来の公共への奉仕を本旨とする中・上流階級中心の組織から、労働者諸階層とりわけ

因を、生来粗暴な性格で暴力に愛着を抱く下層階級が構成員である点や警察力の弱さに帰した<sup>(40)</sup>。しかし、消防隊やギャングは単に粗暴な集団としての側面だけでなく、暴力を政治の一手段として用いることで、地域の支配や秩序形成を図る集団としての側面も持っていた。「シフラー」や「シフラー消防隊」がネイティヴィスト政党「アメリカン・リパブリカン党」(the American Republican Party) によって設立されたことや民主党のアイルランド人政治家 W・マクマリン (William MacMallin) がモウヤメンシング地区の消防隊やギャングを牛耳ったことが示すように、これらの組織は権力機構の末端として、下級官吏の任免などにも影響力を有し、一定程度地域住民の意識や願望を代弁してもいたと考えられる<sup>(41)</sup>。また、アイルランド人コミュニティにおいては、特に港湾労働の分野で、ギャングが雇用の差配や賃金交渉、スト破りの監視などの役割を担い、労働組合的な機能も果していた<sup>(42)</sup>。

しかし、一定の社会的機能を有しつつも、消防隊やギャングは住民の要求全てに答える組織ではなかった。しかもそれらは、排他性故に成立した組織でもあった。これに対し、黒人コミュニティの諸組織は教会と富裕層が中心となっており、黒人住民の多様な要求に答えるべく、コミュニティ全体が取り組むというスタイルで整備されたものだった。

無論、完璧なものではなかったが、一八三〇年代から四〇

年代にかけて国内外からの急激な人口流入によって過密化したシーダー通り周辺において、黒人コミュニティの諸組織がかなり異彩を放つものだったことは間違いないといえるよう。

### (三) 反黒人暴動と黒人コミュニティ

従来の研究では、反黒人暴動は屢々黒人・白人間の就業上の争いや黒人との異人種融合への白人の嫌悪・恐怖といった要因と結びつけられてきた。本節では反黒人暴動と黒人コミュニティのありようとの関係を考察するが、さしあたってはこの二要因の検討から始めたい。

一八三四年暴動の調査委員会は、暴動の原因につき報告書の中で次のように述べた。「特に白人労働者の間には次の如き意見がひろがっている。コミュニティの特定部分が、可能ならいつでも、白人より黒人を雇いたがるので、働けるし働くことを願う多くの白人が失業している。その一方、黒人は仕事にありつき、案々と家族を養っている。かくて多くの白人労働者は仕事に就きたいと願いながらも、暇で貧乏なままだ、という意見である。先の暴動において、群衆や諸集団の中にいた者は、誰しもこうした不満を耳にしたに違いないし、この不満が暴徒の中でも最も活動的な分

子の多くを刺激した……」<sup>(43)</sup>。

確かに国内農村部からの移住者やアイルランド人移民は、不熟練労働市場において黒人と競争関係にあったし、白人新来者や失業者が黒人を使う雇主を脅したり、黒人を暴力的に除去することで職をえようとしたりした可能性は否定できない。実際、一八三四年暴動の際には黒人を雇う製靴業親方や煙突掃除人の家が攻撃されているし、「普段と変わりなく仕事をしていた黒人が、スクールキル河岸で繰り返し襲われ、虐待された」<sup>(44)</sup>。第二章でもみたように、一八四二年暴動二日目でも同様の事例が観察されている。また、一八三四年、四二年とも景気後退期で失業率が高かったことも、就業上の争いという要因を無視しえないものとして見るようにも見える。

しかし、例えばJ・ランシーの三四年暴動の研究によれば、暴動参加者の殆どが黒人労働者とは直接の就業上の競争関係にはなかったこと、つまり暴動参加者の職業には黒人が加わっていない場合が多いことが明らかとなっている<sup>(45)</sup>。また、数次にわたる反黒人暴動での暴動参加者の行動経路や攻撃対象をみると、黒人コミュニティの諸組織への攻撃が計画的かつ一義的であったのに対し、黒人労働者や雇主への攻撃は二義的と結論づけられる。これらの事実は、少なくとも就業上の争いという要因からのみ反黒人暴動の原

因を説明することの難しさを示している。

一方、異人種融合に対する白人の感情も単純に反黒人暴動と結びつけることはできない。確かに異人種融合については、上流階級から労働者まで様々なレヴェルの関心を集めていた。「黒人の友」として伝統的に黒人の向上を支援したクエーカーも、黒人との社会交渉に制限を設けたし、一八三八年のペンシルヴェニア・ホール放火暴動では、ホールが異人種融合の天国となっているとの噂が人びとの興奮をよんだ<sup>(46)</sup>。しかし、現実には両人種の社会交渉は完全な禁忌とはなりえず、シーダー通り周辺ではベドフォード通りにみられるように、両人種は折り重なるように暮らしたし、両人種を客とする酒場、遊戯場、「フライング・ホース」もその一つ)、売春宿も存在した。一八三四年・三五年・四九年暴動では、「潜水鐘」と黒人の床屋、「カリフォルニア・ハウス」が攻撃されているが、これを異人種融合への怒りや嫌悪という要因からのみ説明することは難しい。ベドフォード通りをはじめ、他の異人種融合の場が必ずしも激しい攻撃の対象とはなっていないからである。むしろ見方を変えれば、「潜水鐘」も「カリフォルニア・ハウス」も流行の酒場であり、特に後者は美麗な外装と高価な内装を施し、白人を妻に迎える程に成功した店、黒人の床屋も数人の白人を囲う程に財産を蓄積した店と考えることもで

きよう。

確かに白人暴動参加者の動機は多様性を孕んでいたと思われる。しかし、第二章で検討した暴動の特徴からみても、就業上の争いや異人種融合への反発といった要因も含めて、様々な動機を貫ぬいて流れる共通の認識が存在していたと考えられる。この問題をみる上では、数次にわたる暴動において黒人教会が激しい攻撃を受けた点に注意すべきである。前節でも指摘したように、黒人教会はコミュニティ組織網の中心として、黒人コミュニティ全体の価値観を体現する存在だった。そうした教会を叩くことは、即ち黒人コミュニティ自体のありようへの反対表明だったと考える。一八三四年暴動の調査委員会は、黒人教会への攻撃が宗教的偏見に基づくものではなく、「黒人会衆が集い無秩序で騒がしい態度を示す教会があることで、近隣が悩まされること」によるとしたが、この苛立ちの背後に教会に象徴化された黒人コミュニティのありようへの批判をみることは難しくないだろう。

同調査委員会は、「黒人は……案々と家族を養っている」のに白人は「貧乏なままだ」という白人労働者の不満を指摘した訳だが、ここで問題となるのは特定業種における就業上の争いというよりも、全般的な経済状態のあり方、つまり黒人の安楽な生活が白人の苦難という犠牲の上に成立

しているという認識である。確かに、黒人の大家が白人借家人に攻撃されたという事実を示すのは難しいが、重要なのは黒人の中に実際に白人に家を借すものが存在したという事実、黒人の繁栄が白人の苦しみから引き出されると信ずるに足る証しが存在した事実であろう。この認識が暴動参加者共通のものであったことは、攻撃対象が示している。

一八三四年暴動では裕福な黒人の家屋や家財が集中的に攻撃された。襲撃された家屋の多くは「堅固な煉瓦造り」であり、それらがシーダー通り周辺の平均的な黒人の生活水準からすれば、かなり裕福な家庭だったことも被害報告からわかる。<sup>(48)</sup>一八三五年暴動でも暮し向きの良い黒人家屋が標的となっている。さらに、こうした攻撃対象の選別の一方で、周辺の木造家屋や黒人貧困層への攻撃は激しくはなかったし、少なくとも優先して行なわれてはいない。

従って、以上のような攻撃対象は黒人コミュニティにおける社会的・経済的「成功」と「安楽な生活」を代表する諸個人と財産、これを支えまた象徴するコミュニティ諸組織だったと考えられる。黒人教会同様、「ハイラム・アフリカン・メーンソン支部」や「スミス互助ホール」、黒人禁酒ホールへの攻撃もこの脈絡からなされたといえよう。そして、こうした攻撃対象設定の背後には、一部の黒人の社会的上昇への意図を含めた黒人コミュニティのありように対

する憤懣、白人民衆内の原生的な平等感覚の存在を指摘しうるのである。

この憤懣や平等感覚は、自らの分を弁えない生意気な黒人の姿勢への苛立ちという形で、屢々表明されている。一八三四年暴動の調査委員会は黒人に「(白人の)怒りや偏見、悪感情を生まないために、道を歩く時も集会を催す時も出しゃばらず、礼儀正しく、不快感を与えないよう身を処す」ことを求めた。<sup>(49)</sup>また、白人新聞『ペンシルヴェニア・ガゼット』紙(*Pennsylvania Gazette*)から黒人新聞『フリーダムズ・ジャーナル』紙(*Freedom's Journal*)に転載された次の記事にも、その苛立ちははっきりと表われている。「昨夜行われた黒人の仮装舞踏会で、とんでもないお笑い草が演じられた……極めて醜悪な装いで『相應しく』着飾った黒人紳士淑女を乗せた馬車が到着した。これら黒き神々を乗せた馬車の多くに、白人の御者や下男が付き従っていたことは注目に値する。実際、今述べたような人々の行為や活動に真剣な注意が払われても良い頃なのであり、もし事態がこのまま進行したなら、主人と召使いが持ち場を交替するのにどれ程の時間がかかるか調べてみるべきかもしれない。<sup>(50)</sup>」

確かに、多分に皮肉に満ちたこの記事の苛立ちには、非合理的な人種差別感情に裏打ちされているともいえよう。M・

フェルドバーグが主張したように、都市自由黒人がその同胞である黒人奴隷同様に無力な存在だと証明するために、白人民衆は暴力を行使し、黒人への優越意識を確認したのかも<sup>(51)</sup>もしれない。しかし、差別ないし差別感情は常にそれらが生まれた個別具体的状況に則して、その様態や論理を明らかにする必要がある。非合理的な人種差別感情という点からだけでは、何故シーダー通り周辺という特定の地域で、特定の時期に暴動が頻発したのかは十分説明できないのである。その意味では、アイルランド人移民を含む白人民衆が急激に人口を増し、社会的・経済的に恵まれない生活を強いられたという事実と、黒人コミュニティが総体として貧しい一方で、整備されたコミュニティ組織と活動的に裕福な指導層を持つという姿を明確に示し始めたという事実、この二つの事実が一八三〇年代から四〇年代のシーダー通り周辺で同時に発生したことを、反黒人暴動の発生と深い関わりを持ったと考えられるのである。

註

- (1) Joseph W. Wilson, *Sketches of the Higher Classes of Colored Society in Philadelphia*, Philadelphia, 1841, p. 13.
- (2) *Ibid.*, p. 14.
- (3) Norman C. Johnston, "Caste and Class of the Urban

Form of Historic Philadelphia," *Journal of the American Institute of Planners* 32 (1966), pp. 334-350.

(4) *Ibid.*, p. 340.

(5) フィラデルフィアにおいて本格的に居住隔離が進行するのは南北戦争後となる。しかし、それ以前の時期にも徐々に<sup>(51)</sup>はもろが、居住隔離の進行はみられた。Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 374.

(6) the Pennsylvania Society for Promoting the Abolition of Slavery, *The Present State and Condition of the Free People of Color of the City of Philadelphia and Adjoining Districts*, Philadelphia, 1838. (以下 *The Present State* と略) この調査は「自由黒人全体が救貧院や刑務所のみに適するコミュニティの層で、いかなる好意にも値しなると主張する」人びとを「撃退」し、当時進行中だった黒人選挙権剥奪の動きをおし留める目的のために実施された。Edward Needles, *Ten Years' Progress: A Comparison of the State and Condition of the Colored People in the City and County of Philadelphia from 1838 to 1847*, Philadelphia, 1849, pp. 7-8.

(7) *The Present State*, p. 7.

(8) Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 372.

(9) The Society of Friends, *A Statistical Inquiry into the Condition of the People of Color of the City and Districts of Philadelphia*, Philadelphia, 1849, p. 14. (以下 *Inquiry* と略)

- (10) 一八三七年から四八年の間に、一人あたりの動産額は一〇%減少した。また、家族総数は三〇%増加したが、不動産所有者は九%から七%へ減少した。Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 372.
- (11) Stuart Blumin, "Mobility and Change in Antebellum Philadelphia," in Stephan Thernstrom and Richard Sennett, eds., *Nineteenth Century Cities*, New Haven, 1969, pp. 165-206.
- (12) 白人上流階級にすぎず、E. Digby Baltzell, *Philadelphia Gentlemen*, N.Y., 1958; Edward Pessen, *Riches, Class, and Power before the Civil War*, Lexington Mass., 1973.
- (13) 一七八七年から一八四八年の期間における主な指導者一〇〇人の職業をみると、商業三六%、知的専門職二四%、手工業二四%、その他一六%となる。これらの人びとは其稼働一例えば床屋の夫と教師の妻が一般的だった。Julie P. Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community, 1787-1848," Ph. D. diss., Bryn Mawr College, 1982, p. 86.
- (14) こうした点も含めた黒人エリート層のライフスタイルについて、Emma Jones Lapsansky, "Friends, Wives, and Strivings: Network and Community Value among Nineteenth Century Philadelphia Afroamerican Elites," *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 108-1 (1984), pp. 3-24.
- (15) 一十七五年の「ペンシルベニア奴隷制廃止協会」結成に象徴されるように、フィラデルフィアは奴隷制反対運動の中心地であり、自由黒人と白人活動家との提携も長い歴史を持った。また、F. ショーンソンやR・ホーグのように白人上流社会と繋がりを持つ黒人も多数存在した。こうした点の概要は Dubois, *Philadelphia Negro*; Turner, *The Negro in Pennsylvania*; Benjamin Quarles, *Black Abolitionists*, N.Y., 1969.
- (16) *The Present State*, p. 9; *Inquiry*, pp. 17-18.
- (17) *The Present State*, p. 6.
- (18) *The Present State*, p. 5; *Population of the U.S. in 1860: Compiled from the Originated Returns of the 8th Census*, Washington D.C., 1864, pp. 431-432.
- (19) Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 375.
- (20) 手工業労働者のうち七五人が総額一三三〇、〇〇〇ドルの不動産を九六、〇〇〇%の動産を所有した。*Inquiry*, p. 18.
- (21) *Appendix to the Memorial from the People of Color to the Legislature of Pennsylvania in Hazard, Register of Pennsylvania*, June 9, 1832.
- (22) Benjamin Bacon, *Statistics of the Colored People of Philadelphia*, Philadelphia, 1856, pp. 13-15.
- (23) *Inquiry*, p. 17; Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 376.
- (24) *The Daily Sun*, Nov. 10, 1849 (Laurie, *Working People of Philadelphia*, p. 157 459)
- (25) Hershberg, "Free Blacks in Antebellum Philadelphia," p. 382.
- (26) Stuart Blumin, "Residential Mobility within the Nineteenth Century City," in A.F. Davis and M.H. Haller, ed., *The Peoples of Philadelphia*, p. 42; David R. Johnson, "Crime Patterns in Philadelphia, 1840-1870," in Davis and Haller ed., *The Peoples of Philadelphia*, p. 95; Scharf and Westcott, *History of Philadelphia*, I, pp. 513, 521.
- (27) Mathew Carey, *Essays on the Public Charities of Philadelphia*, Philadelphia, 1829, vi; *Inquiry*, p. 33.
- (28) *Inquiry*, p. 33; Needles, *Ten Years' Progress*, p. 14.
- (29) *1847 Friends Census, Southwark and Moyamensing*, pp. 18-22; (Emma Jones Lapsansky, "South Street Philadelphia, 1762-1854: 'A Haven for Those Low in the World,'" Ph. D. diss., Univ. of Pennsylvania, 1975, pp. 145-147 459)
- (30) *Inquiry*, pp. 32-44.
- (31) Lapsansky, "South Street Philadelphia," pp. 149-150.
- (32) Lapsansky, "South Street Philadelphia," chap. 3. 例えは、スドフォード街には一八三三―三九年の時期に二一八世帯が居住し、そのうち七一世帯が黒人世帯だった。このうち Henry Wilson とらう黒人唯一の大家はスドフォード街に三軒の煉瓦造り家屋を所有した。また、コンジュニティ指導層の一人 J・フォートンも貸し家を所有してゐた。
- (33) *Inquiry*, pp. 18-30; Lapsansky, "Afro-American and Racism," p. 58-59.
- (34) James B. Browning, "The Beginnings of Insurance Enterprise among Negroes," *Journal of Negro History* 22 (1937), p. 421; *The Present State*, pp. 26-28; *Inquiry*, p. 22. 相互扶助協会とはわけメンシムスとの結びつきが強かった。通常は月額会費一二二〇セント程度だった。また、全組織の半分以上が女性組織だった。
- (35) 一八三七年の教会数は次の通り。( )内は信者数。監督派一(一〇〇)・ルーテル派一(一〇)・メソジスト八(一八六〇)・長老派二(三二五)・ペンテコスト四(七〇〇)
- (36) Stuart Blumin, "Residential Mobility," pp. 38-39. さらに重要なのは、この地域での白人人口が急激に増加したことである。表からもわかるように、一八五〇年の白人人口は一八三〇年の二・五倍である。また、一八六〇年時点でのサウスワック地区・モウヤメンシング地区のアイランド人口の割合は二一・三% (黒人は四・五%) である。*Population of the U.S. in 1860*, pp. 431-432.
- (37) Dennis Clark, *The Irish in Philadelphia: Ten Generations of Urban Experience*, Philadelphia 1973, chap. 3 and 5. 拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」五七―六〇頁。
- (38) 拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」四六一―四七頁。
- (39) George Foster, "Philadelphia in Slices" (1848), *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 93-1 (1969), pp. 35-38; Bruce Laurie, "Fire Company and Gangs in Southwark: The 1840s," in Davis and Haller

アンチ・スラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ(鶴月)

ed., *The Peoples of Philadelphia*, pp. 71-87.

- (40) *Fisher's Diary*, p. 122.
- (41) 拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」四七、七三、七六頁。
- (42) Laurie, *Working People of Philadelphia*, pp. 157-158.
- (43) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Sept. 27, 1834.
- (44) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Aug. 23, 1834.
- (45) Runcie, "The Race Riot of August, 1834," pp. 194-202.
- (46) Russell F. Weigley, "A Peaceful City": Public Order in Philadelphia from Consolidation through the Civil War," in Davis and Haller ed., *The Peoples of Philadelphia*, p. 161; *History of Pennsylvania Hall, Which was Destroyed by a Mob on the 17th of May, 1838*, Philadelphia, 1838, p. 116. 北部白人の異人種融合への恐れと「スラム」は Richards, *Anti-Abolition Mobs*, pp. 40-46.
- (47) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Sept. 27, 1834.
- (48) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Aug. 23, 1834. 一例をあげれば、「シベイン通り二〇九番地」N. Butler (黒人) 所有の煉瓦造り三階建家屋。窓ガラス全壊。家具の被害甚大。被害総額三五〇元。<sup>(2)</sup>
- (49) *Abdy, Journal*, III, pp. 332-333.
- (50) *Freedom's Journal*, March, 14, 1828.
- (51) Michael Feldberg, *Turbulent Era*, p. 43.

ことが、わが身のためなのだ。<sup>(2)</sup>一八三〇年にフィラデルフィアのペセル教会で開かれたのを皮切りとする一連の「自由有色人集会」(the Convention of Free People of Colour: 以下単に「黒人集会」と記す)も、自己改善を最も中心的なテーマの一つとし、一八三五年には「神聖な道徳改良運動の怠りない実践」のため「アメリカ道徳改良協会」(the American Moral Reform Society)を発足させた他、種々の自己改善組織の設立を推奨した。<sup>(3)</sup>

フィラデルフィアの黒人コミュニティ指導層は、一七八七年の「自由アフリカ人協会」(the Free African Society)創設以来、自己改善の必要性を再三表明し、「黒人集会」でも中心的勢力として活躍した。特に「アメリカ道徳改良協会」では、会長にJ・フォートン・シニア、会計担当にJ・キャシー(Joseph Cassey)、書記にJ・フォートン・ジュニア、R・パーヴィス、W・ホイッパー(William Whipper)が就任、フィラデルフィア勢が要職を独占した<sup>(4)</sup>つまり、フィラデルフィア黒人コミュニティ指導層は、自己改善の追求においては北部黒人を先導する立場にあった訳である。

彼らの目標や価値観は、「アメリカ道徳改良協会」の一八三七年次大会でW・ホイッパーが行なった演説にはつきりと示されている。「……われわれは、人間生活を破壊

#### 四、黒人コミュニティ指導層の抵抗姿勢

前章で明らかにした黒人コミュニティのありようは、コミュニティ指導層の目標や価値観を色濃く反映したものであった。同時にそうした目標や価値観は、白人からの差別や偏見をどう受けとめ、いかに抵抗していくかという問題と不可分の関係にあったといえよう。本章では、まずこの抵抗姿勢の特徴について検討し、続いて、反黒人暴動が抵抗姿勢にどのような変化をもたらしたかを示すこととした。

##### (一) 自己改善路線

F・クーパーの研究などによっても明らかのように、一八世紀末以来北部黒人コミュニティ指導層が最大の努力を傾けたのは、個人・コミュニティ双方における自己改善の推進だった。<sup>(5)</sup>先にも引用した合衆国初の黒人新聞『フリーダムズ・ジャーナル』も、奴隷制や公民権の問題よりも自己改善の問題にかなりのスペースを充て、例えば次のように主張した。「偏見を弱め、未だ束縛されている幾多の同胞の境遇を改められるか否かは、偏にわれわれの行ないにかかっている。裏表ない礼儀正しい振舞や勤勉、儉約によって、われわれが尊敬と愛顧に値すると世間を納得させる

に導くもの全ては福音の教えに反するのだと信じ、平和のための運動を唱導するものである……われわれは『教養や力あるもの』ではなく、『偉大で善きもの』となるために、健全なる道徳を備えた教育を促進するよう努力しよう……われわれは全てにおける節制と絶対禁酒を唱導しよう。贅沢は個人的に害があるのではない。社会に影響を及ぼす、本質的に罪深いことなのだ。だからわれわれは儉約を唱導しよう。<sup>(6)</sup>

右にみられる信仰、教育、禁酒、儉約といった徳目の強調は、黒人コミュニティの現実と密接な関係にあった。貧困と犯罪の蔓延という現実である。「ペンシルヴェニア奴隷制廃止協会」の社会調査報告は、コミュニティ組織の充実ぶりを記録する一方で、貧困と犯罪の問題に多くの紙数を割いている。一八三七年には、救貧院収容者一、六七三人中その一四％は黒人が占め、モウヤメンシング刑務所収監者二、〇〇五人中三七％も黒人だった。黒人の罪状としては、暴行・浮浪が全体の七五％を、残りを夜盗・窃盗が占めている。調査報告は黒人の間に犯罪が頻発する原因として、「社会のもつ偏見が、黒人が知的・道徳的改善のための便宜を享受するのを妨げ、貧困が黒人から、知識の獲得に必要な時間を奪っている」ことを挙げ、同時に「極めて屢々教育のない結果生じる飲酒が、ぞっとするような犯

罪の原因になる」と主張した。<sup>(6)</sup>

このように社会調査報告は、貧困や犯罪との関わりにおいて教育を重視している訳だが、この点はコミュニティ指導層も同様だった。例えば、W・ホイッパーは「フィラデルフィア有色人読書協会」の講演で、教育は大事、即ち「全ての人間の偉大さの礎石、それなくしては、われわれは何ものにもなれない……いや、社会にとっての恐るべき迷惑者を生みだす」だけだと主張している。ここで重要なのは、教育を柱とした自己改善の努力が、二重の目的を有したことだろう。一つは、教育によって数々の徳目を徹底させることで、コミュニティの大多数を占める貧困層の生活の経済的・道徳的改善を図る目的である。もう一つは、コミュニティ全体の改善を通じ黒人コミュニティへの認識を改善する目的である。後者について、ホイッパーは次のように述べている。「われわれの状況を改善する手段は……厳格な注意を教育に方向けることである。コミュニティを気品あるものへと向上させることに尽力した人びとが、その最高にして最良の年月をこの目的のために捧げ……その有益な生涯を閉じた、そのことをわれわれは知っている……」<sup>(8)</sup>。さらに、ホイッパーも参加した一八三二年の「黒人集会」の「呼びかけ」は、次のように主張した。「われわれが、偏見の影響力が減じ、われら自身が尊敬されるのを

目のあたりにすることになるとしたら、それは啓蒙的な教育の恵みであるにちがいない」<sup>(9)</sup>。

つまり、教育を柱とした自己改善を通じ、「コミュニティを気品あるものに向きさせる」ことで、黒人が尊敬される存在であるのを白人社会に納得させ、延いては差別や偏見を減じていく、という抵抗姿勢が右のような主張からは窺えるのである。『ペンシルヴェニア・レジスター』紙には、フィラデルフィア黒人コミュニティ指導層の意見が盛んに表明されているが、例えば一八三一年には、教育、倹約、禁酒に支えられた生活により、「一貫して秩序正しい道徳的生活を示すことにより、自らの落ちぶれた状況についての誤って誇張された説明を、悪意なきものとする」という決意が述べられている。また、同年には「フィラデルフィアでは、(黒人) 貧民の扶養で白人に重荷を負わせるどころか……(黒人の払う) 税金は自らの貧民を扶養するに十分なばかりか、白人貧民の扶養の資金にもなっている」との主張、翌年には、黒人の間には多数の相互扶助協会在存在し、その会員は誰一人として法廷に引き出されたことはない、これがなによりも黒人コミュニティの尊敬される性格を物語っていると主張などがみられる<sup>(10)</sup>。こうした自己改善路線に従った生活を、最も良く実践したのが指導層だったことは言うまでもない。先に引用した

著作において、J・ウィルソンは、指導層が「自分の収入内で暮らし……やつのことで体裁を保っている」とする一方で、彼らが絨毯が敷かれ、ソファ、食器棚、鏡、ピアノなどが備えられた居間で寛ぎ、活発に社交を展開する様を描いている。「絵画や器楽、刺繍」のために女性たちは各家庭を訪問しあい、集会所ではコンサート、講演会、討論会、読書会などが開かれた。そうした集まりでは、古代ローマ史から医学、黒人の苦難まで広範な話題が取り上げられた。また、ウィルソンは彼らが絶対禁酒を励行することに驚いている<sup>(11)</sup>。

自己改善路線の追求は、具体的には堅実なコミュニティ諸組織の拡充整備と活発な活動、コミュニティ指導層の尊敬される生活を生みだした。しかし、シーダー通り周辺を中心とするこの現象は、前章でもみたように白人住民の側には、黒人の意図とは全くことなる意味を持ったのである。特に一八四二年暴動の発端となった黒人の禁酒パレードへの攻撃は象徴的な出来事だった。一八三七年恐慌後の福音主義的プロテスタント諸派の影響力増大は、白人衆衆内に禁酒運動の高揚をもたらした。これは、出現しつつある産業社会の求める価値観―勤勉・倹約・時間厳守そして禁酒―とそれに支えられた新たな道徳の受容と深い関係を持った。しかし、その一方で白人衆衆内には―特にアイル

ランド人には―この新たな価値観や道徳の受容を頑強に拒む伝統的文化が存在していた。伝統的文化は、固有の労働・生活習慣に支えられ、酒場、様々な娯楽、民族的祭礼、消防隊や街頭ギャングを媒介とした集団的自律性を特徴とする生活世界をもたらしていた<sup>(12)</sup>。こうした伝統的文化を持つ人びとにとって、黒人が禁酒を唱導することは人種的敵意とは別の次元で、背後にある価値観を鮮明に意識させたのである。まさに彼らにとっては、黒人のパレードが掲げ持つ自由の太陽の旗は、自分たちの焼死をイメージさせたといえよう。暴動後、当局が黒人禁酒ホールを取り壊したのも、こうした白人住民の反感を察知したためと考えられる。

同様に一八三五年暴動の発端となった事件も象徴的である。自己改善路線を受容したと思われる黒人の一団が、ある西インド人召使いのアフリカ的な礼儀や服装を嘲笑し、狼狽した召使いが主人に新しい服を求めたが認められず、逆上のうえ主人を斧で撲殺したという事件である<sup>(13)</sup>。無論、指導層は自己改善路線の追求が、白人の嘲りや怒りをかうことに無頓着だった訳ではない。舞踏会についての『フリーダムズ・ジャーナル』の記事は、「年に一―二回踊っても罪になるとは考えない」としながらも、「舞踊会を良いと信じる少数の人びと」は「社会全体から嘲けられるも

をつくるべきではない」と論評した<sup>(14)</sup>、黒人禁酒運動への白人の反感を懸念したS・グロスタター牧師(Stephen H. Gloucester)は、会衆に「無分別」な催しに参加せず、祈禱会で八月一日を祝うよう、四二年暴動前に主張していた。しかし、こうした懸念や反黒人暴動による物理的破壊にも拘らず、自己改善の努力はコミュニティ全体が取り組むべき最優先の課題として、粘り強く追求されたのである。

一方、フィラデルフィアの黒人コミュニティ指導層は、奴隷制に対して無関心だった訳ではない。R・パーヴィスやJ・フォートン、J・C・パウアズ(John C. Bowers)、C・W・ガードナー(Charles W. Gardner)、J・マクラミル(James McCumill)を始めとして、指導層は「アメリカ奴隷制反対協会」(the American Anti-Slavery Society)や種々の地方組織で活躍した<sup>(16)</sup>。一八三六年に結成された「フィラデルフィア婦人奴隷制反対協会」(the Ladies' Anti-Slavery Society of Philadelphia)で、J・フォートンは次のように述べた。「誰が奴隷制を傍観できるというのか。誰がその非人間的な残虐行為に戦慄を覚えずにいられるというのか……奴隷制は、それが存在する国を枯らしてしまう胸枯れ病であり、自らの食欲を満たすべく禿鷲のように、犠牲者の生命を常食とするのだ<sup>(17)</sup>。」しかし、コミュニティ指導層と奴隷制問題の関わりをみ

る際には、奴隷制問題が彼らの優先課題ではなかった点に注意すべきである。確かに一八三〇年代初頭の奴隷制廃止運動の全国的高揚の中で、指導層はW・L・ギャリソンらを中心とする即時無条件解放を主張するグループを支持し、『解放者』(the Liberator)の普及にも努め、様々な組織活動にも尽力した<sup>(18)</sup>。しかし、一八三〇年代末までに、彼らは白人奴隷制廃止運動家と距離をおき始める。J・フォートンは「アメリカ奴隷制反対協会」を支持し続け、R・パーヴィスらも奴隷制問題と関わりは持ち続けたが、奴隷制廃止運動は指導層にとっては、しだいに共通の関心としては意識されなくなり、あくまで個人的問題として処理されるようになる。

この背景には様々な理由が存在した。運動内にも存在した人種差別、コミュニティ指導層内の対立、白人運動家の自由黒人への無関心などである<sup>(19)</sup>。特に第三の点は決定的な要素だった。一八世紀末のコミュニティ指導層第一世代、つまり「自由アフリカ人協会」に結集したR・アレンやC・バステイル(Cyrus Bustill)らは、奴隷制の中に生まれ自らの手で自由を勝ちとった人びとだった。しかし、一八三〇年代・四〇年代の指導層第二世代は、何人かの例外を除けば自由民として生まれ育った。確かに一七八〇年に州内の奴隷の漸次的解放が法制化されたから奴隷は存在し

たが、フィラデルフィアには一八三〇年に一三人、一八四〇年にはたった四人を数えるのみだった<sup>(20)</sup>。指導層第一世代にとって、奴隷制問題は自らの存在する空間に働きかけるべき直接的課題だったが、第二世代にとって奴隷制はフィラデルフィアへ潜入する夥しい数の逃亡奴隷やそれを追跡するプランターと代理人を通して認識されるものだった。指導層第二世代は奴隷制廃止運動に関わり、逃亡奴隷の救済に力を注ぎはしたが、彼らにとってより重要だったのはコミュニティの発展であり、都市社会という自らの存在する空間の中での差別と闘うことだったのである。

その手段として、黒人コミュニティ指導層は自己改善路線を追求した。そこに示された、白人の理性に訴えることで差別や偏見は根絶しようという楽天的信念が、社会の進歩や人間の合理性への信奉という点で、労働運動を始めとする同時代の様々な社会改良運動と共通性を有したことに注目すべきだろう<sup>(21)</sup>。しかし、啓蒙主義的発想という共通の場に立ちながら、黒人は決して「コモン・マン」の仲間入りを果たすことはなかった。それにはつきりと気づいた時、指導層の抵抗姿勢は変化し始めた。次節では政治的権利の問題を中心に、その変化について検討する。

## (二) 抵抗姿勢の変容

史苑(第四八巻第二号)

一八三一年から翌年にかけて、ペンシルヴェニア州議会では、州内への自由黒人の移住禁止や州内に居住する黒人への統制強化(地元当局の発行した身分証明書、郡間移動の際は常に携帯させる)を求める法案などが次々と提出された。この動きは、一八三一年の「ナット・ターナーの反乱」の影響で、南部からの黒人流入人口が増加することへの白人の懸念を直接の引き金とするものだった<sup>(22)</sup>。

これら法案に対するフィラデルフィア黒人コミュニティ指導層の抵抗姿勢は、彼らが一八三二年一月と翌年一月に起草した、州議会への請願書に集約されている。前者の起草にはJ・フォートン、R・パーヴィス、W・ホイッパリーの三人が<sup>(23)</sup>、後者の起草にはJ・パウアズ、J・マクラミル、J・C・ホワイトの三人があたった<sup>(24)</sup>。二つの請願書はともに、黒人がコミュニティの向上のためにいかに努力しているかを強調し、白人の理解を求めるもので、自己改善路線の精神に貫かれていた。前者は「労働と勤勉」の原理を浸透させる努力を強調し、後者は「黒人はただ今のままにしておかれることを求める……頭を抑えつけるのは、黒人が現在享受している以上のものを求め、撃退するに値する時間で十分ではないか」として、現状維持を支持している。さらに後者は、州憲法に論拠を求めながら、堅実な市民である黒人に証明書の携帯を求めることの理不尽さを訴えてい

る。結局、地方当局に法執行能力がないことを理由に、これらの法案は廃案となった。しかし、これらの法案は財産や社会的地位に関わりなく全黒人を対象とした訳で、その意味では自己改善路線を通じて両人種の橋渡しをするという、黒人コミュニティ指導層の目標や役割にとっては重大な挑戦だったといえよう。

指導層の抵抗姿勢がひとつの曲り角にさしかかるのは、黒人選挙権剥奪をめぐる動きにおいてだった。ペンシルヴェニア州における黒人選挙権は、自由黒人の政治的地位の曖昧さから地方当局の裁量に委ねられていたが、一八三八年の州憲法改正会議において正式にこれを否定し全白人成年男性に選挙権を与える改正案が採決された。黒人コミュニティ指導層は、先ず一八三八年一月にハリスバーグで開催中の改正会議に、黒人選挙権剥奪に反対する請願書を提出した。これは一八三二・三三年の請願書と同じく自己改善路線の精神に立つもので、一七八〇年の奴隸制廃止法に論拠を求めつつ個人的自由保障の伝統に訴える一方で、黒人が自らの改善に努力している点を強調したものだ。また、この請願書は一八三四年暴動にも言及し、黒人は無法な存在であるどころか「無抵抗のまま悪に晒された」と主張している。<sup>(26)</sup>先にも述べたように、改正会議では「ペンシルヴェニア奴隸制廃止協会」による社会調査報告も、代

あるだろうか。われわれは自らの権利を他の人を傷つけるために用いたことがあるだろうか。その権利を賄賂を受け取ることで汚したことがあるだろうか」と問いかけた。<sup>(28)</sup>

しかし、後半に入ると『訴え』はそれまでの請願書とは異なる性格を示し始める。最も重要なのは、選挙権資格について次のように述べている点だろう。「われわれは、勤勉と真価の報いとしてのみ選挙権を持つつもりだ。われわれは、選挙権資格がどれ程高く設定されるかは心配していない。何人もその肌の色によって排除されるべきではなく、同一の規程が何人にも適用されること、それがわれわれの求める全てなのだ。」(傍点は原文イタリック)<sup>(29)</sup>つまり、黒人コミュニティ指導層は選挙権を特権として捉え、それを全黒人に保障するつもりのないことを言明しているのである。これは指導層の自らの社会的・経済的特権の主張ともとれるし、だとすればその主張が、まさに白人普通選挙権の保障が日程にのぼっている時、即ち白人が少なくとも理念上は、社会的・経済的特権を否定している時になされたことには留意する必要がある。

しかし、より問題とすべきは、ここにはっきりと自己改善路線にたつ指導層のディレンマを見てとれることである。「肌の色によって排除されるべきではない」という主張は、実際は「肌の色」によって選挙権は剥奪されたのだという

議員たちに配布されている。

改正案採決の後、一八三八年三月に黒人コミュニティ指導層は、有権者への訴えを配布することで事態に対応する戦術にでた。改正案は有権者による批准を必要としたからである。訴えの作成にはR・パーヴィス、J・パウアズ、R・フォートン(Robert Forten)・J・バイアス(James Bias)・J・P・バー(John P. Burr)・J・コーニッシュ(James Cornish)・J・ニードム(James Needham)の七人があたったが、このうち四六歳のバーを除けば残りは皆三〇歳前後の指導層第二世代に属していた点は注目される。<sup>(27)</sup>前節でも述べたように、指導層第二世代は自らの存在する都市空間における差別との闘いを第一に考え、それ故第一世代よりも政治的権利の問題にも敏感だったからである。

『訴え』はまず、黒人は一七九〇年の州憲法の下で選挙権を付与されているとの信念を披瀝し、「ある個人から選挙権を奪う時、あなた方はその個人については、統治を専制へと貶めてしまうのだ。それは万人に対する統治を専制へと貶める第一歩なのだ」と主張して、統治における被治者の同意の重要性を強調した。さらに『訴え』は、これまでの請願書と同様に黒人コミュニティの行ないに白人の注意を向けようとして、「われわれは白人を抑圧したことが

指導層の認識を示している。にも拘らず、彼らは人種の問題を「勤勉と真価の報い」という道徳の問題に摩り替えざるをえなかった。自己改善路線は、黒人はその肌の色故ではなく、墮落しているが故に差別される、という前提の上に成立していたし、コミュニティ向上の努力への白人の認知を不可欠のものとした。従って、指導層は自己改善路線にたつ限り、人種の問題を正面切って唱えることはできなかった。それは自らの依って立つ路線の破産を意味したからである。しかし、『訴え』は、選挙権資格問題に続く、黒人は異人種融合を意図しているとの白人の意見への反論において、これまでの請願書にみられた嘆願を超えて、激しい口調で人種による差別を非難せざるをえなかった。<sup>(30)</sup>『訴え』にみられるこの不整合は、指導層のディレンマの大きさを物語るとともに、彼らの抵抗姿勢が変化し始めたことを表わしてもいたのである。

この変化を決定的なものとしたのが一八四二年暴動だった。攻撃対象が示すように、四二年暴動は自己改善路線への白人民衆による暴力的否定だったし、暴動後の当局の対応はその否定が白人社会全般によるものであることを示した。R・パーヴィスは、暴動時に自らも攻撃対象となることを予想し、玄関でピストルを手に警戒していた。実際に彼は攻撃は受けなかったが、四二年暴動は彼に大きな衝撃

を与えた。<sup>(31)</sup> 彼は黒人が完全に見捨てられたと感じた。暴動の数週間後、ある白人奴隷制廃止論者への手紙で彼は次のように述べている。「……社会全体の冷淡と無慈悲について、どのようにお伝えしたらよいかわかりません。新聞も教会も、警察も聖職者も、そして悪魔さえもわれわれに敵対しています。世間の目からすれば、われわれは完全に無なのだとは確信しています。」<sup>(32)</sup>

四二年暴動は物理的被害に留まらない大きな影響を指導層に及ぼした。同年八月にフィラデルフィアで開催が予定されていた「黒人集会」と「アメリカ道徳改良協会」年次大会はともに中止され、後者は組織的には実質上解体することとなった。「黒人集会」は翌年ニューヨーク州で開かれたが、フィラデルフィアからの参加者はなかった。フィラデルフィアの黒人指導層が再度「黒人集会」を主催するのは一八五五年のこととなるが、その頃には彼らはもはや全国的影響力を完全に失なっていた。<sup>(33)</sup>

暴動後の指導層の対応は様々だったが、総じて彼らは、コミュニティの発展―例えば相互扶助組織の拡充による経済的安定―を最優先課題として、それと直接的関係のない問題とは距離をおいたといえよう。例えば、自らの教会を破壊されたS・グロスターは、白人側の反応に柔軟に対応する方針をとり、奴隷制や禁酒の問題から離れて、教会

信条を侵害し、自らの原理原則に恥辱を与え、自らが犠牲とした人びとに墮落と窮乏と邪悪をもたらした」として、白人が真向から非難された。<sup>(36)</sup> さらに、黒人への訴えにおいて、パーヴィスらは自らの抵抗姿勢が生まれかわったことを宣言する。「われわれは新しい立場に向うのだ。わが父たちは個人的自由のために闘った。われわれは今や政治的自由のために戦うのだ……奴隷たちは地面をなめ、自由を押し殺すことを学んできた。しかし、われわれは奴隷ではない。人間として当然持つ自由への権利は、憲法によって保障されているのだ。」<sup>(37)</sup>

黒人が何故選挙権を奪われたかについて、この訴えは次のように断言する。「状態は口実にすぎない……彼らは肌の色のためにわれわれ全員から選挙権を奪うことにしたので。」<sup>(38)</sup> として、人種を禁忌とした自己改善路線の放棄を明らかにする。「われわれは、白人ではないから選挙権を剥奪されたという事実を心に留めねばならない。他の人間は己の主義主張を裏切ること己の信条を捨てられるかもしれない。しかし、われわれは、己の肌の色を捨てることはできない。われわれは、問題に直面せざるをえないのだ。肌の色に基づいた問題である。」<sup>(38)</sup>

パーヴィスら指導層は、生活・教育水準向上のための自己改善の努力を捨てた訳ではない。彼らは道徳的向上と選

活動に専念することとなる。ここに、フィラデルフィアの指導層が奴隷制問題に冷淡であると、黒人奴隷制廃止論者たちから激しく非難された理由の一つがあったといえよう。<sup>(34)</sup> しかし、こうした状況は指導層の間に依然として自己改善路線が受容され続けたことを意味した訳ではなかった。とりわけR・パーヴィスを中心に、指導層内には自己改善路線が望むこと全てを達成しないという認識が広がっていた。個人やコミュニティの向上が白人の偏見を弱めることとはないのであり、白人の抱く偏見は白人自身が解決すべきだとする考えである。この考えが指導層の抵抗姿勢とはっきりと結びついたことを示したが、一八四八年二月に黒人選挙権回復問題のためにハリスバーグで開かれた「ペンシルヴェニア州有色人市民集会」(the State Convention of the Coloured Citizens of Pennsylvania) だった。パーヴィスが委員長を務めた他、この集会でフィラ

デルフィアの指導層は中心的役割を果たしたが、彼らが選挙権をめぐる積極的方策をうちだすのは、『訴え』以来実に一〇年ぶりのことだった。<sup>(36)</sup>

この集会や採択された白人有権者と黒人それぞれに向けた二つの訴えでは、以前の請願書にみられた融和的な嘆願も『訴え』にみられた不整合も払拭されている。集会では、まず白人有権者こそが「自らの共和主義者としての忠誠の

挙権、白人の偏見が関係を持たないという認識に達したのである。それは次の主張にはっきりと現われている。「もし、われわれが白人の持つ権利や特権を有するに足る前に向上する必要があるなどという宿命論を受け入れるなら、われわれは結果的に創造の段階における劣等性を認めることになるのだ。」集会では、州内の黒人に選挙権回復運動の前進を訴え、州議会への請願を行なう一方で、白人支持者の獲得を目的とした「ペンシルヴェニア州市民連合」(the Citizens' Union of the Commonwealth of Pennsylvania) の結成が宣言され、この組織は連邦議会にも請願書を送るなど、積極的活動を行なうこととなる。<sup>(39)</sup>

いうまでもなく、ペンシルヴェニアにおける黒人選挙権の回復は一八七〇年に至って達成されるが、一八五〇年代を通じてフィラデルフィアの黒人コミュニティ指導層は、選挙権回復運動に力を傾け、W・ホイッパーが「自由党」(the Liberty Party) 支持に向かったことが象徴するように、以前は拒否していた政治活動へも関与し始めた。<sup>(40)</sup> その一方で、彼らは奴隷制の問題にも取り組み続けた。パーヴィスは「ペンシルヴェニア奴隷制反対協会」や「フィラデルフィア自警連合」で活発に活動したし、ホイッパーやパウアズも逃亡奴隷救済に尽力した。しかし、その関わり方は、ますます個人的なものになった。フィラデルフィア黒

アンティスラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ(鶴月)

人コミュニティ指導層は、選挙権回復をコミュニティ共通の課題として捉える中で、黒人は墮落してしまふから差別されるのではなく、白人の人種的偏見こそが差別の根幹にあると主張し、州レベルでの指導権を獲得することを通じて、新たな抵抗の方向を模索してしまふこととなる。

註

- (1) Frederick Cooper, "Elevating the Race: The Social Thought of Black Leaders, 1827-50," *American Quarterly*, 24 (1972), pp. 604-625.
- (2) *Freedom's Journal*, March 23, 1827.
- (3) *Minutes of the Fifth Annual Convention for the Improvement of the Free People of Colour* ..., p. 31 in Howard H. Bell ed., *Minutes of the Proceedings of the National Negro Conventions, 1830-1864*, N.Y., 1969.
- (4) *Ibid.*, p. 32.
- (5) William J. Whipper, *The Minutes and Proceedings of First Annual Meeting of the American Moral Reform Society, Held at Philadelphia, In the Presbyterian Church in Seventh Street, below Shippen, from the 14th to the 19th of August, 1837*, in Dorothy Porter ed., *Early Negro Writings, 1760-1837*, Boston, 1971, p. 207.
- (6) *The Present State*, pp. 12-20.
- (7) William Whipper, *An Address in Wesley Church on*

*the Evening of June 12, before the Colored Reading Society of Philadelphia, for Mental Improvement*, 1828 in Porter, *Early Negro Writings*, p. 107.

- (8) *Ibid.*, p. 115.
- (9) *Minutes and Proceedings of the Second Annual Convention for the Improvement of the Free People of Colour in The United States*, Philadelphia, 1832, p. 34 in Bell ed., *Minutes*. 註世の集巻に於て「即ち此なる」に對し「即ち此なる」。
- (10) Hazard, *Register of Pennsylvania*, March 12, May 7, 1831 and June 9, 1832.
- (11) Wilson, *Sketches of the Higher Classes*, pp. 56-57, 97-116.
- (12) 拙稿「トマス・ペイトー一八四四年暴動の歴史と意義」四四一-四四八、五四一-五六頁。
- (13) Hazard, *Register of Pennsylvania*, Aug. 1, 1835; Schart and Westcott, *History of Philadelphia*, I, p. 642.
- (14) *Freedom's Journal*, March 14, 1828.
- (15) *Emancipator*, Sept. 1, 1842 (Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," p. 511 45).
- (16) Quarles, *Black Abolitionists*, pp. 12-28.
- (17) James Forten, *An Address Delivered Before the Ladies' Anti-Slavery Society of Philadelphia, on the Evening of the 14th of April, 1836*, Philadelphia, 1836, pp. 4-5 (L.P. Curry, *The Free Black in Urban*

*America*, p. 226 45)

- (18) キャリントン・ウィンチの黒人コミュニティ指導層の關係に於て Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," pp. 307-313. 一八三四年時或はリナー・モントゴメリー・ボロメーの「トマス・ペイトー三〇〇〇の解放論」講義書が存在した。Donald M. Jacobs, "William Lloyd Garrison's *Liberator* and Boston's Black, 1830-1865," *New England Quarterly* 44 (1971), p. 261. ハーヴェス・マンローによれば「トマス・ペイトー自警連合」(the Vigilant Association of Philadelphia)を結成して、被圧奴隷救済に尽力した。Joseph Boromé, "The Vigilant Committee of Philadelphia," *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 92 (1968), pp. 320-351.
- (19) ガードナー・グロスターは「ヒナ・モーク」のタックス派を導くことに努めた。Quarles, *Black Abolitionists*, p. 68.
- (20) *U.S. Fifth Census*, pp. 64-65; *Sixth Census*, pp. 150-153.
- (21) 労働運動と啓蒙主義の關係に於て Edward Pessen, *Most Uncommon Jacksonians: The Radical Leaders of the Early Labor Movement*, Albany N.Y., 1967, chap. 7.
- (22) Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," pp. 463-468.
- (23) *Memorial of the Subscribers, free people of color of the city of Philadelphia and its vicinity to the Senate and House of Representatives of the Commonwealth of Pennsylvania*, 1832 in Herbert Aptheker, ed.,

*A Documentary History of the Negro People in the United States: Colonial Times Through the Civil War*, N.Y., 1951, pp. 126-132.

- (24) *Memorial of the Subscribers*....., 1833 (Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," pp. 468-469 45)
- (25) Turner, *Negro in Pennsylvania*, pp. 169-170. 州憲法に於て「自由民」に自由黒人が含まれるか否かが争点となつた。改正論議中の議論は、黒人の劣等性や異人種融合の恐れなども強調した民衆代表議員が終始主導権を握つた。Turner, *Negro in Pennsylvania*, pp. 169-193; Edward Price, "The Black Voting Rights Issue in Pennsylvania, 1780-1900," *Pennsylvania Magazine of History and Biography* 100-3 (1976), pp. 360-361.
- (26) Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," pp. 483-484.
- (27) *Appeal of Forty Thousand Citizens Threatened with Disfranchisement to the People of Pennsylvania*, Philadelphia, 1838 in Aptheker, *A Documentary History*, pp. 176-186.
- (28) *Ibid.*, p. 177, 181.
- (29) *Ibid.*, p. 183.
- (30) *Ibid.*, pp. 184-185. 尚、改正案は一八三八年一〇月、圧倒的賛成をよび承認された。
- (31) ハーヴェスは暴動後じつとペンシックス郡の自分の農場に避難してしまふ。Boromé, "The Vigilant Committee," p. 326

- (32) *Liberator*, Sept. 9, 1842 in Apteker, *A Documentary History*, p. 220.
- (33) *Minutes of the National Convention of Colored Citizens: Held at Buffalo, .....*, 1843, p. 3 in Bell ed., *Minutes*, 145-6の間、州内での選挙権回復運動の主導権は「マンハッタン」の黒人指導層が握った。Price, "Black Voting Rights," p. 363.
- (34) Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," pp. 534-553. 特にグロースターの姿勢に象徴されるように黒人教会の態度が非難的となった。
- (35) *Minutes of the State Convention of the Coloured Citizens of Pennsylvania, Convented at Harrisburg, December 13th and 14th, 1843*, Philadelphia, 1849.
- (36) *Ibid.*, p. 5.
- (37) *Ibid.*, p. 12, 14.
- (38) *Ibid.*, p. 15, 17.
- (39) *Ibid.*, pp. 22-24; Price, "The Black Voting Rights," p. 364.
- (40) Quarles, *Black Abolitionists*, chap. VIII.

## 五、結 ぶ

ここまでの、黒人コミュニティをめぐる内在的・外在的ダイナミクスについての検討結果は、以下の四点に整理す

ることができる。第一には、黒人コミュニティ内で追求された自己改善路線が、シーダー通り周辺を中心とするコミュニティ組織網の整備や一部黒人の社会的上昇と密接な関係を持ったこと、第二には、反黒人暴動において、白人人民衆は黒人コミュニティ内の社会的・経済的「成功」と「安楽な生活」を代表する個人とその財産、およびそれらを支援象徴するコミュニティ諸組織を主要な攻撃対象としたことである。さらに、この二点から、シーダー通り周辺という都市空間においては、黒人コミュニティの内在的ダイナミクスが外在的ダイナミクスを引き出す重要な要因となったこと、一八四二年暴動という外在的ダイナミクスが、黒人コミュニティ指導層の抵抗姿勢を変容させる契機となったことが確認できる。即ち、黒人コミュニティをめぐる内在的・外在的ダイナミクスの間には、以上のような相互作用の存在したことが結論づけられるのである。そして、この相互作用の存在は、黒人・白人の人間関係が極めて複雑な要素を孕む問題であり、単に差別とか偏見といった一般的概念だけでは分析しきれないことを示しているといえよう。

それでは最後に、反黒人暴動および黒人コミュニティと近代的都市社会形成との関わりについて、若干の考察を加えておきたい。黒人コミュニティが自己形成を始めた一七

九〇年当時、フィラデルフィアは人口五万五、〇〇〇人程度の商業都市だったが、七〇年後の一八六〇年には約六〇万の人口を有する、合衆国第二の産業都市へと変貌を遂げていた。<sup>(1)</sup>フィラデルフィアにおける工業化は、織物業や鉄工業、南部市場向けの生活消費材生産を中心に、少なくとも一九世紀中頃に至るまでは、機械化や工場制の導入によって推進されたというよりも、手工業生産の伝統と移民の大量流入を基盤に、分業による生産の大規模化・集団化によって支えられた。こうした工業化の進展の中で、全般的没落状況に追い込まれた熟練職人層を中心に、労働者諸階層は一八三〇年代を軸にして、一〇時間労働要求ゼネストや「一般労働組合」(General Trades' Union of the City and County of Philadelphia) 結成に代表される<sup>(2)</sup>激しい抵抗を行なった。

この抵抗を支えた労働組合指導層の急進主義思想の最大の特徴は、「生産者」と「非生産者」に社会を二分し、「非生産者」という共通の敵を設定することにより、様々の対立要因を内包する、過渡期の不均質な労働者諸階層に利害の同一性を示し、「階級」として発想・連帯することを社会変革の第一歩としたことだろう。筆者の知る限りでは、組合指導層が黒人を市民としても、労働者としても支持したという記録はない。しかし、急進主義思想の基盤を明確

化したW・ヘイトン(William Heigton)が、「社会の幸福にとつては不可欠かつ有益な働きをなす」として、<sup>(3)</sup>不熟練労働者をも「生産者」と規定したことは、港湾労働や建設労働の分野に一定の地歩を占めていた黒人労働者が、少なくとも理論上は、「階級」的連帯の可能性を持っていたことを示唆している。無論、黒人労働者の姿勢自体を十分吟味しなくてはならないが、その可能性は反黒人暴動によって、完全に破砕されたのである。

一八三〇年代の運動の高揚期において、アイルランド人を含む白人不熟練労働者の戦闘性は、階級意識の形成に大きなインパクトを与えた。シーダー通り周辺を含む市周辺南部はその現象が最もはっきりとみられた地域であり、反黒人暴動の検討の際に指摘した、白人人民衆内の素朴で暴力的な平等感覚の発露が、ストライキなどでもしばしば観察された。従って、原生的な平等感覚に支えられた白人人民衆の戦闘性は、白人の階級意識形成にはプラスの方向に作用したものの、黒人に対してはマイナスの方向に働いたといえよう。だとすれば、原生的な平等感覚が黒人コミュニティという標的に向けられることで生じた反黒人暴動は、「非生産者」階級に全面的に向けられていたかもしれない、白人人民衆の戦闘性や敵意の方向を変えてしまうバイパスの役割を果たしたとも考えられるのである。<sup>(4)</sup>

白人支配層にとっては、この戦闘性の歪みは一種の安全弁だった。まさにヘイトンが「非生産者」と非難した彼らは、裕福さや顕在度において黒人有産層をはるかに上回っていたからである。この意味で、黒人の選挙権を剥奪し全白人男性に普通選挙権を付与した一八三八年の州憲法改正会議は、反黒人暴動における白人暴動参加者の意図や行為を認知し、この安全弁の適法性を保障したものと見えよう。同時に選挙権の剥奪が全黒人を対象としたことは、白人と黒人の橋渡しをするという黒人コミュニティ指導層の役割を否定して一八世紀末の人種関係に幕をおろし、黒人コミュニティが都市社会内で非特権的存在として最底辺に固定化されることを意味したのである。<sup>(5)</sup>

一方、民族集団間の対立が激化する中で、一八四四年に白人民衆と治安当局が全面衝突するという事態に直面すると、白人支配層は民衆による集团的暴力行使の非合法化や警察機構・統治機構の整備を通じて、都市社会の新たな秩序の確立を推進し、一八五四年の市・郡統合をもってこれをほぼ完成していった。この中で民族集団間の対立は、エスニック・ポリティクスの原型が形成されることによって、街頭での消防隊やギャングの争いを除けば暴力を媒介とする必要を失い、制度化された平和な形に転換したのである。<sup>(6)</sup>

S・B・ウォーナー・ジュニアは、このエスニック・ポ

リティクスの存在のために、一九世紀後半のフィラデルフィアが意味のある民主主義社会たりえなかったと述べた。<sup>(7)</sup>しかし、実質はともかく少なくとも制度上は民主主義を保障され、政治的発言力を有した白人諸集団は、自らの権利を主張する中で社会的・経済的向上を図る可能性を有した。それに対し、選挙権を剥奪された黒人は、政治過程から排除され、都市社会における発言力を抹殺された。こうした対照的な立場を前提としながら、「フィラデルフィア社会史プロジェクト」の研究成果が示すように、雇用・居住・教育など生活のあらゆる局面において、黒人に対する差別と不平等は制度的・構造的なものとなっていく。<sup>(8)</sup>そして、近代的都市社会を形成する構造的ダイナミクスは、この制度的人種差別と構造的不平等という枠組が確立する中で作動したのであり、反黒人暴動はその枠組の確立においては、梃子の役割を果たしたと考えられるのである。<sup>(9)</sup>

註

- (1) Sam Bass Warner, Jr., *Private City: Philadelphia in Three Periods of Its Growth*, Philadelphia, 1968, p. 35; *Population of the United States in 1860*, p. 438.  
 (2) 拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」三八一四四頁。  
 (3) William Heigton, *An Address to the Members of*

*Trade Societies and to the Working Classes, Generally* ..... Philadelphia, 1897, p. 6.

(4) ここ一五年來、アメリカにおいては一九世紀前半期の労働史研究は大いに前進した。しかし、白人労働者の抵抗思想や民族文化については綿密な分析がなされる一方で、黒人労働者との関わりや人種差別意識については殆ど検討されていない。階級意識形成を考える上で今後この問題の分析は避けられないものとなろう。

(5) 本稿においては扱えなかったが、黒人指導層の抵抗姿勢を考える際に、移住問題は重要な要素となるといえる。フィラデルフィアの指導層は「アメリカ植民協会」にははつきりと反対したが、「黒人集会」がカナダ移住を熱心に討議したことが示すように、彼らの中にもカナダやトリニダードへの移住を主張するものがいた。Curry, *Free Black in Urban America*, pp. 232-237; Winch, "The Leaders of Philadelphia's Black Community," chap. III. 植民協会についてのわが国の研究としては、竹本友子「アメリカ植民協会の歴史的性格」『史苑』四二一・二(一九八二)

(6) 拙稿「フィラデルフィア一八四四年暴動の歴史的意義」六六一七七頁。

(7) Warner, Jr., *Private City*, p. 156.

(8) Theodore Hershberg et al., "A Tale of Three Cities: Blacks, Immigrants, and Opportunity in Philadelphia, 1850-1880, 1930, 1970," in Hershberg ed., *Philadelphia*, pp. 461-491.

(9) 本稿では、黒人コミュニティにおける指導層と一般大衆の関係という領域には踏み込めなかった。しかし、断片的史料から窺う限りでも、両者の間には一定の緊張関係を認めうる訳で、同コミュニティの内在的ダイナミクスをより詳細に分析していくためには、指導層内の路線対立や一般大衆の意識・文化の解明とともに、この領域に光をあてる必要があると考える。また、フィラデルフィア黒人コミュニティの経験を全国的背景の中に位置づける作業も今後の課題の一つと考えよう。尚、本稿執筆中に Gray B. Nash, *Forging Freedom: The Formation of Philadelphia Black Community, 1720-1840*, Harvard Univ. Pr. が刊行予定であることを知ったが、残念ながら未見である。

〔付記〕本稿執筆にあたり、史料蒐集の点で富田虎男氏(立教大学)、本田創造氏(桜美林大学)のお世話になった。記して厚く御礼申しあげたい。

(札幌学院大学文学部教員)